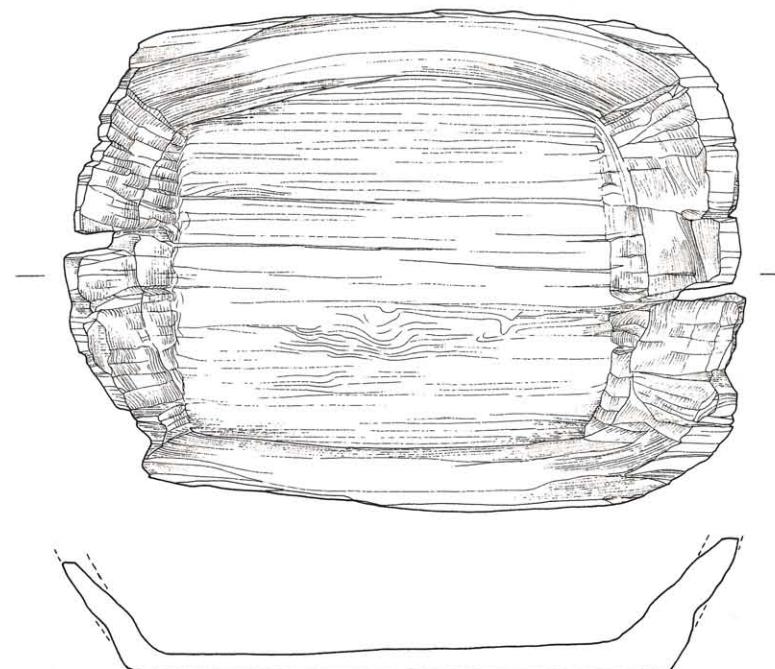


# 木の本遺跡発掘調査概要・V

— 一級河川平野川改修工事に伴う発掘調査 —



SE 205 出土木製品 (S=1/4)

2001年3月

大阪府教育委員会



## はしがき

大阪府八尾市は、河内平野の東南部に位置します。河内という名が示すようにこの地域の歴史は、そのまま治水の歴史であり、地中深くに埋もれた遺跡が数多く存在します。木の本遺跡もそのひとつで、昭和56年の遺跡発見以来、弥生時代から中近世に至る複合集落として注目されてきました。

大阪府教育委員会は、一級河川平野川改修工事に先立ち亀井遺跡、田井中遺跡そして木の本遺跡の発掘調査を実施してまいりました。これまでの調査で、亀井遺跡では弥生時代から古墳時代を中心とした遺構と遺物、田井中遺跡では縄文時代晚期から弥生時代を中心とした遺構と遺物を発見、そして木の本遺跡では古墳時代前・中期を中心とした遺構や遺物を確認してまいりました。

今回の木の本遺跡の調査でも現在の平野川のヘドロや砂の下から古墳時代の遺構や遺物を発見することができました。発見された遺物には朝鮮半島との交流を示す土器も含まれており、この時代の研究の貴重な資料になると思われます。これらの調査成果により古墳時代の集落の様相がさらに明らかになると共に、地域の歴史像を豊かにしていくものと思われます。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に感謝申し上げますと共に、今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

## 例　　言

1. 本書は、一級河川平野川改修工事に先立って実施した八尾市南木の本3丁目所在木の本遺跡発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が技師藤田道子を担当者として実施した。
3. 現地調査は、平成12年3月から5月まで行い、出土資料等の整理作業は一部現地作業と並行して行い、平成13年3月に終了した。
4. 本書の執筆・編集は藤田が行った。なお出土遺物の分析の原稿は三辻利一氏（奈良教育大学教授）に執筆していただいた。

# 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第2章 調査成果	
第1節 基本層序.....	2
第2節 主な遺構と遺物.....	2
第3節 小結.....	6
第3章 考察	
第1節 集落の変遷.....	8
第2節 出土遺物の検討.....	8
第4章 木の本遺跡出土土器の蛍光X線分析.....	16

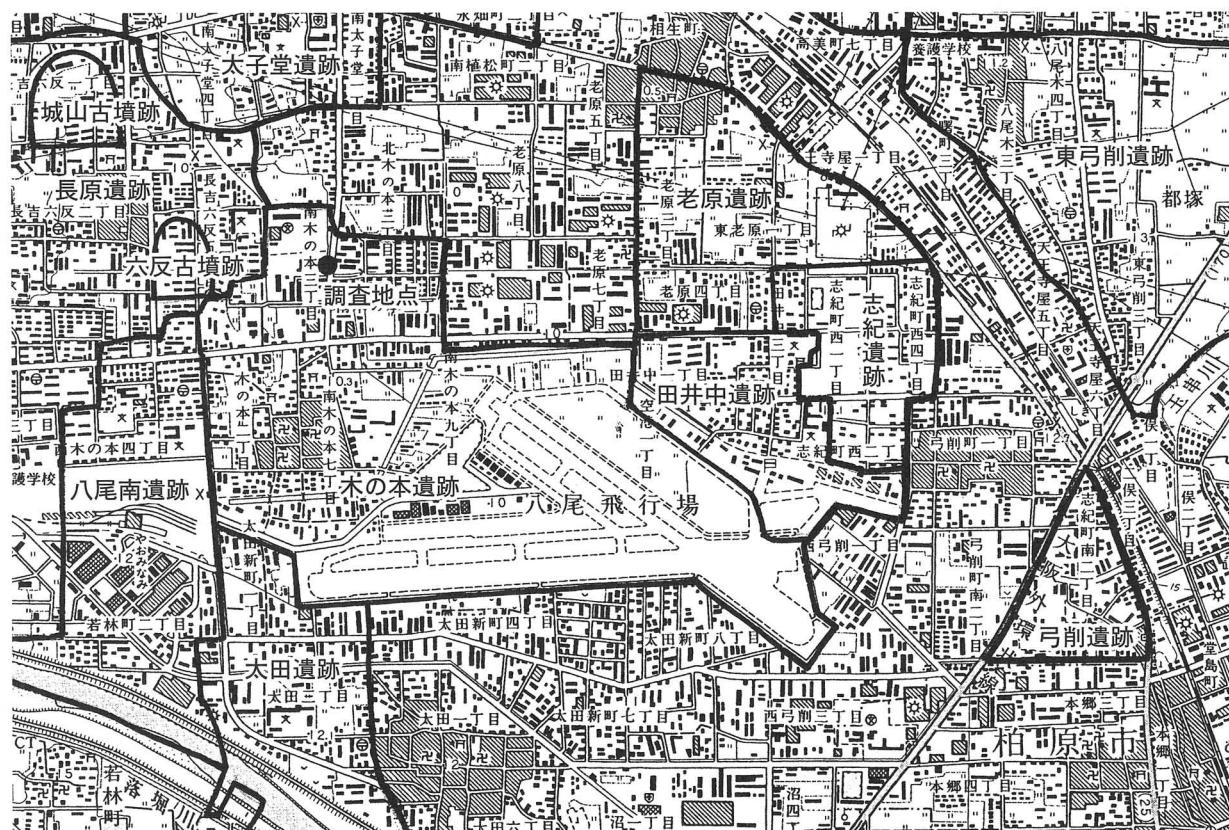


図1 調査地点と周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

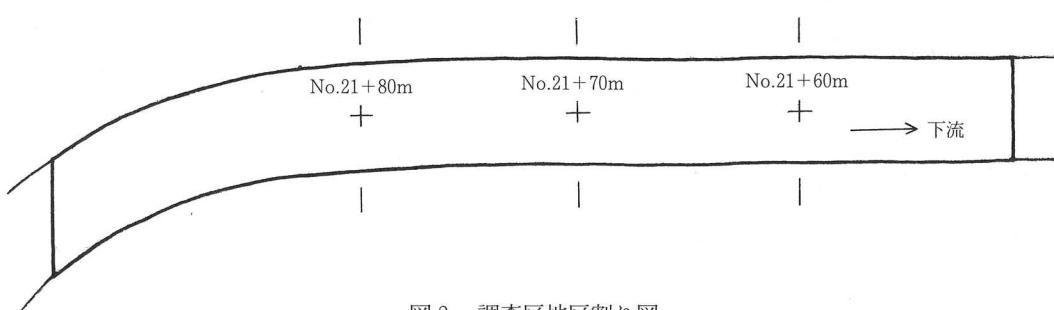


図2 調査区地区割り図

## 第1章 はじめに

**遺跡の位置（図1）** 木の本遺跡は八尾市西南部南木の本を中心に広がる遺跡で、昭和56年南木の本4丁目で店舗建設工事に伴い発見され、遺跡として周知された（注1）。その後の調査で、東西2km、南北1.3キロメートル、南西部に八尾空港を含む広大な範囲を持ち、弥生時代中期から古墳時代、古代、中世から近世に至る複合遺跡であることが判明している。遺跡は、古大和川により形成された沖積地に立地しており、周辺には西に八尾南遺跡、長原遺跡、東に田井中遺跡、北に太子堂遺跡などが存在する。

**調査に至る経過** 一級河川平野川は大和川の支流のひとつで、現在では柏原市で大和川と分かれ八尾市を横断し大阪市で第二寝屋川に合流する。この川は幅が狭く、底が浅い上に大雨の際には一気に大量の雨が流入する河川であった。そこで大阪府土木部は川底を掘り下げ護岸を改築する工事の実施を計画した。この計画に対し、流路が周知の遺跡内を通過することから、大阪府教育委員会は遺跡の取り扱いについて大阪府土木部と協議を行った。その結果、まず試掘調査を実施し、遺構の有無を確認の上必要なところから調査することとなった。

木の本遺跡内では平成8年度に第1地区の調査（注2）が行われ、平成9年度から10年度にかけては第2～5地区の調査が行われた（注3）。本概要報告書で報告する調査区は、平成11年度から12年度にかけて調査が行われた第6調査区で、幅5m、全長45m、調査面積214m<sup>2</sup>である。第6調査区を持って平野川改修工事に伴う木の本遺跡発掘調査は終了となる。

**既往の調査成果** 前述のとおり木の本遺跡の範囲は広い。遺跡内の南東部に該当する八尾空港内の調査では近世の条里に重なる平安時代の条里制遺構を検出している。古墳時代の遺構・遺物は遺跡の北部に集中し、当該期の集落の中心地は遺跡北西部にあるといえよう。弥生時代の遺構・遺物は遺跡が発見される契機となった昭和54年の調査で出土している。

大阪府教育委員会が平成9年度から平野川改修工事に先立ち実施してきた発掘調査は、遺跡北西部を南北に貫く総延長400mのトレーナー調査となった。この調査の結果古墳時代前期から中期にかけての遺構・遺物を多数検出し、当該期の集落の様相が判明しつつある。ほぼ前調査区を通して見られる基本層序は、①旧平野川の埋土もしくは近世の堆積層、②無遺物層もしくは中世遺物包含層、③古墳時代中期の包含層と遺構面、④古墳時代前期の包含層と遺構面となる。しかし古墳時代の遺構面は上流側の調査区では前期、中期1面ずつ計2面認められるが、下流側の調査区では遺構面は1面のみで前期と中期の遺構が重複している箇所がある。また前期の遺構面からは、庄内Ⅱ、Ⅲ式から布留式古段階までの時期の遺構を検出している。

(注1)『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要1980・1981年度』(八尾市教育委員会 1983年3月)

(注2)『木の本遺跡発掘調査概要・Ⅲ』(大阪府教育委員会 1999年3月)

(注3)『木の本遺跡発掘調査概要・Ⅳ』(大阪府教育委員会 1999年12月)

**調査の方法** 改修工事は現平野川流路内を鋼矢板で区切り、水路を確保してから行われる。本書

で記載の調査区は着工順に番号をつけられており今年度は第6調査区となる。現場作業は現平野川底部に堆積していたヘドロ層を土壤改良した後、重機により掘削し、それ以下の層は一層づつ人力により掘り下げ精査した。標高はO.P.を使用した。地区割は工事用の区画を踏襲し、遺物の取り上げにも使用した(図2)。現場作業・整理作業は平成12年3月に開始し、平成13年3月に終了した。本概要はその成果の一部である。

## 第2章 調査成果

### 第1節 基本層序(図3)

調査区全体が河道内に有り、現地表から土層が観察できた箇所はない。調査区西壁(現平野川の右岸川岸部分に当たる)で確認した土層のうち、ほぼ前調査区を通して見られる層について記述する。土層の番号は上層から順次付しているが、各層の上面でとらえた遺構内の埋土についても通し番号を付してある。

第0層 川岸部の盛土・旧表土・ヘドロである。調査区東側ではヘドロ層の下に旧平野川埋土に当たる灰色砂が堆積している。砂層からは、陶磁器、瓦質土器、土師器などが出土した。

第1層から第3層までは調査区西側の川岸部分のみに認められる層である。黄褐色系の粘土で、近世の耕作土層と思われる。

第4層から第9層は暗灰色～オリーブ灰色粘土である。間に微砂や粗砂を含む層を挟む。ほぼ水平に堆積している。調査区東側では第0層の旧平野川の堆積物を除くといきなり第9層が認められる。遺物はほとんど出土していない。第9層を除去した段階で、調査区のほぼ中央で浅い落ち込み状の遺構を検出した。

第16層から第20層はオリーブ黒色粘土を主体とする層で調査区の南半分やや落ち込み状にくぼんだ箇所に堆積している。粘性が強く礫の含有は少ない。多量の古式土師器が出土した。須恵器も少量含む。

第21層から第24層は黒灰色粘土である。調査区北側では下層の灰色砂層の影響を受けてか砂礫が多く混じる。多量の古式土師器、須恵器が出土した。

第33、34層は古墳時代遺構面のベースとなる層である。第34層は灰色砂礫層であり、調査区南側ではこの砂礫層の上層に緑灰色粘土が堆積している。どちらの層からも遺物は出土しなかった。

### 第2節 主な遺構と遺物

主たる遺構面は1面であるが、古墳時代前期、中期の遺構を重複して検出した。図4は第33、34層上面でとらえた遺構平面図である。遺構の分布は調査区の中央微高地となった20mの間に集中している。遺構番号はおおむね南側から検出順に付した。主な遺構について説明する。

微高地の南北両端に幅2メートル程度の溝を検出した。

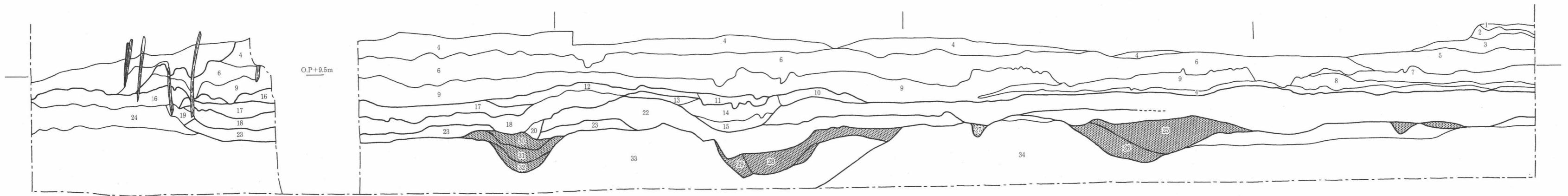


図3 土層断面図

1 暗オリーブ灰色粘土 鉄分沈着が激しい。  
2 暗オリーブ灰色粘質シルト  
3 暗オリーブ灰色粘質シルト 黄褐色微砂が混じる。  
4 暗緑灰色粘質シルト  
5 暗オリーブ灰色粘質シルト 灰色微砂が多く混じる。  
6 暗オリーブ灰色シルト 灰色微砂が多く混じる。  
7 暗オリーブ灰色粘土 炭化物が多く混じる。  
8 オリーブ黒色粘土  
9 オリーブ黒色粘土 黄褐色微砂が混じる。  
おちこみ104  
10 オリーブ黒色粘土 黄褐色微砂が多く混じる。  
11 オリーブ黒色粘土 炭化物が混じる。  
12 11層に粗砂が混じる。  
13 黒灰色粘土  
14 オリーブ黒色粘土 炭化物が混じる。  
15 青灰色～オリーブ灰色粘土  
16 黒色粘土 程1cmから5mm程度の礫を含む。  
17 オリーブ黒色粘土 炭化物が混じる。  
18 オリーブ黒色粘土  
19 黒色粘土  
20 オリーブ黒色粘土  
21 黒灰色礫混土  
22 21層に青灰色土のブロック混じり、上層より礫が少ない。  
23 黒色～暗灰色粘土 程は上層(第16層)より少ない。  
溝234  
25 灰褐色礫粘土 緑灰色土と程5mmまでの粗砂が混じる。  
26 黑灰色粘質シルト 程5mmまでの粗砂が混じる。  
溝222  
27 黑灰色粘質シルト 程5mmまでの粗砂が混じる。  
土坑202  
28 黑灰色礫混土 緑灰色土と程5mmまでの粗砂が混じる。  
29 灰黑色粘土  
溝201  
30 オリーブ黒色粘土 程が少々混じる。  
31 晴灰色礫混土 程が多く混じる。  
32 31層に青灰色土がブロック混じり。  
33 緑灰色～青灰色粘土  
34 灰色砂礫層 径2cm程の小石まで含む。

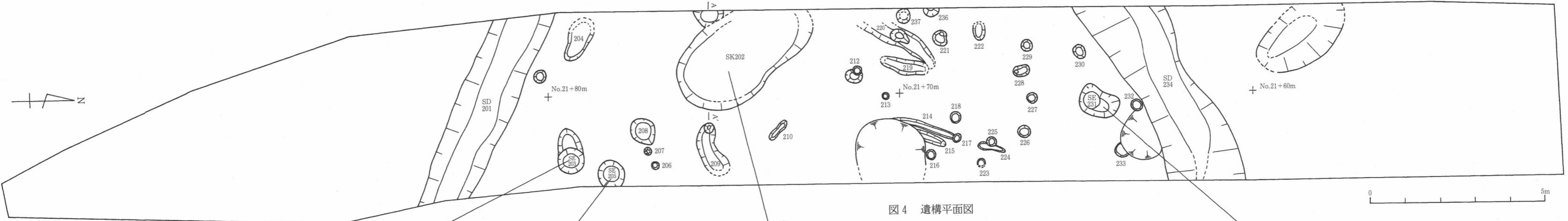
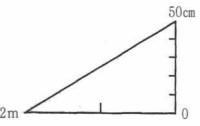


図4 遺構平面図

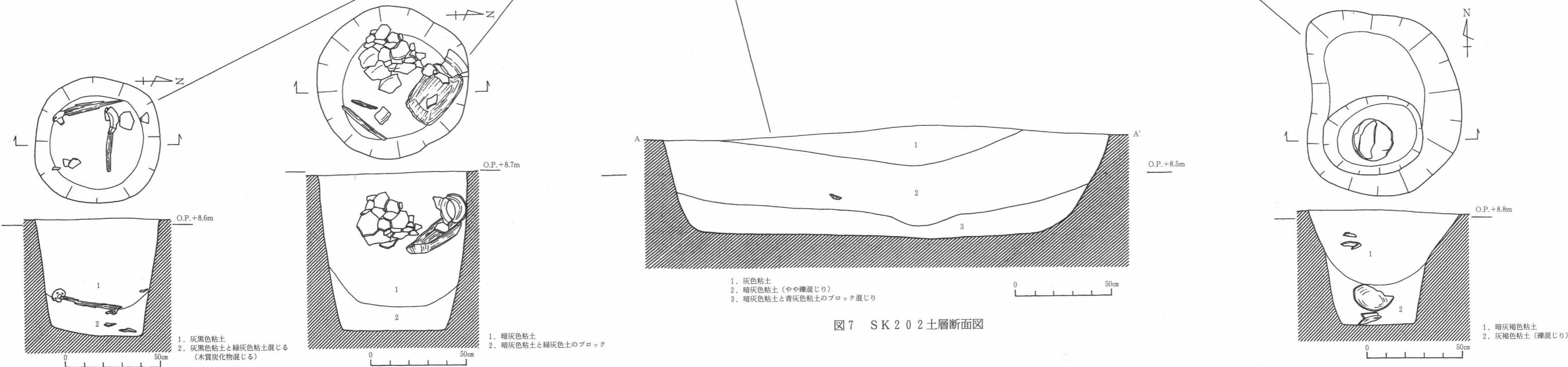


図5 SE 203 遺物出土状況実測図

図6 SE 205 遺物出土状況実測図

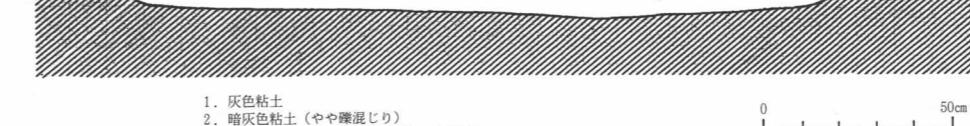
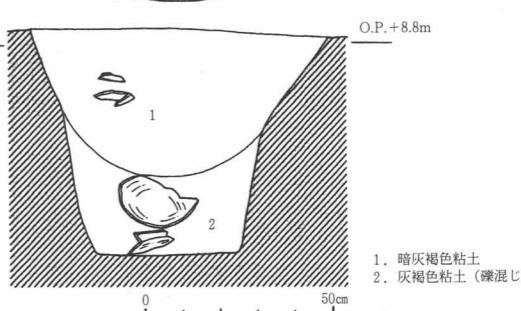


図7 SK 202 土層断面図

1. 灰色粘土  
2. 暗灰色粘土(やや礫混じり)  
3. 暗灰色粘土と青灰色粘土のブロック混じり

図8 SE 231 遺物出土状況実測図



1. 暗灰褐色粘土  
2. 灰褐色粘土(礫混じり)

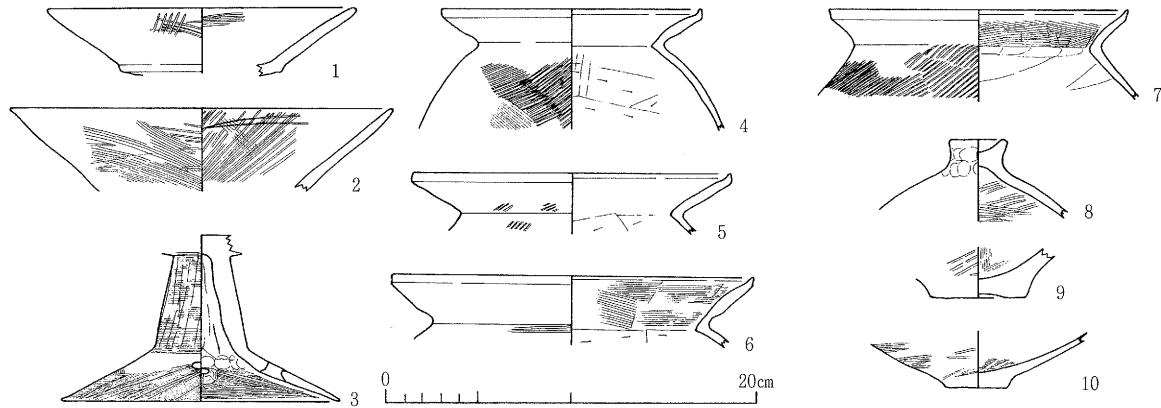


図9 SE 203出土遺物実測図

**S D 201** 微高地の南側で検出した。検出幅1.7m、検出深さ80cm、断面U字型で調査区を南東から北西方向に横切っている。埋土はおおむね3層に分かれ(図3)、各層から古式土師器が多量に出土した。出土した土師器は庄内式期Ⅲから布留式期Ⅲ段階前後のものがある(注1)。

**S D 234** 微高地の北側で検出した。検出幅2m、検出深さ1m、断面U字型で調査区を北東から南西方向に横切っている。埋土はおおむね2層に分かれ(図3)、少量の古式土師器、伽耶産(第4章参照)の須恵器甕の破片1点が出土した。

微高地北より柱穴を多数検出した。柱穴は直線にならぶものが有り、柱穴列に沿って細く浅い溝を検出している。柱穴群の周囲に井戸、土坑等を検出した。井戸は4基検出した。

**S E 203(図5)** 微高地の南よりで検出した。平面形は隅丸正方形で約65cm四方を測る。検出深さは60cmで、埋土はおおむね2層に分かれ。下層の灰黒色粘土と緑灰色粘土のブロック土層、及びその上面から古式土師器、木片、桃核が出土した。完形品は無く、庄内式の甕口縁部破片が多い。

図9はその一部である。出土土器はすべて庄内式期Ⅲ前後の段階におさまる。

**S E 205(図6)** 微高地の南よりで、S E 203と50cmほど間隔をあけて検出した。平面形はほぼ円形で、径約80cmを測る。検出深さは85cmで、埋土は2層に分かれ。図10は出土遺物の一部である。7の二重口縁の壺は、口頸部と体部が離れ、体部はひとかたまりで押しつぶされた状態で出土したが、接合をしてみるとほぼ完形品である。表紙は木製削物の盤である。上辺はやや欠いているもののほぼ完形で出土した。樹種はモミである(注2)。

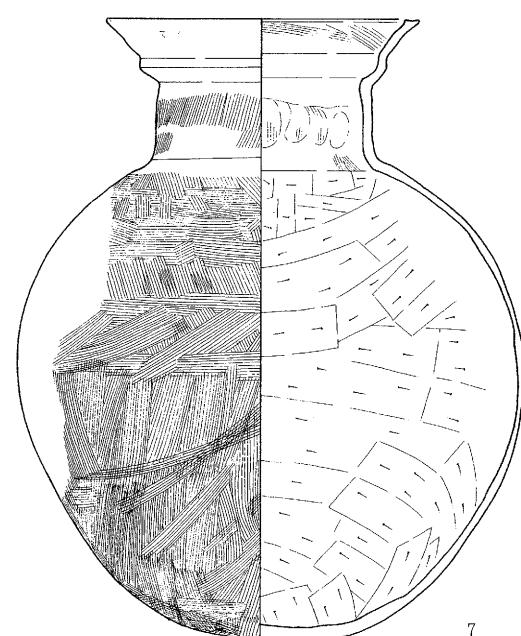
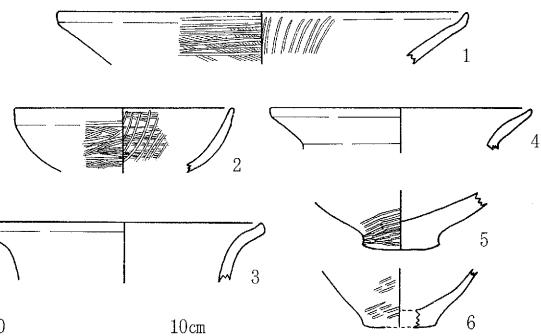


図10 SE 205出土遺物実測図

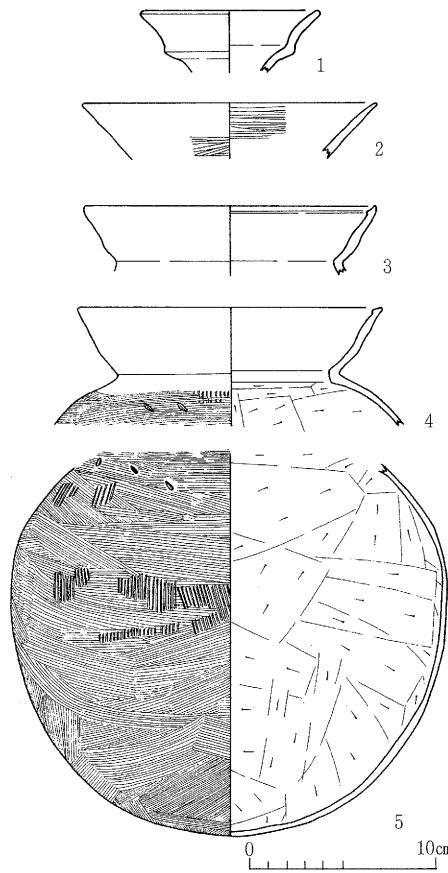


図11 SE 231出土遺物実測図

これらの遺物はいずれも井戸上層から検出されており井戸が廃絶し埋めるときに投げ込まれたと考えられる。

**S E 2 3 1** (図8) 微高地北よりで検出した。検出面での平面形は不整形な楕円形で、長径95cm、短径80cmを測る。掘り下げるに南側のみ深くなり検出深さ60cm、底部径38cmである。埋土は2層に分かれ、どちらの層からも遺物が出土した。図11はその一部である。1～3は上層から、4、5は下層からの出土遺物である。井戸の最底部に4の布留式甕口縁部がすえられ、その上に5の体部が置かれていた。井戸掘削時に意図的におかれたものと思われ、S E 2 3 1は布留式I段階前後に掘削されたものと思われる。

**S K 2 0 2** (図7) 微高地南よりで検出した。平面形は不整形な楕円形で、長径(推)4m、短径2.2mの大型土坑である。埋土は3層に分かれ中下層から古式土師器、初期須恵器が出土したが、とくに中層からは棒状や、板状の木片が多数重なった状態で出土した。板状の木片には焼成痕が残るものもある。図12は出土土器の一部である。1～4は須恵器で、

いずれも陶邑産である。天井部が低く平らな蓋3、静止ヘラ削りの底部を持つ杯身4から陶邑編年I型式第2段階に比定できると思われる。S K 2 0 2からは庄内式期III段階から布留式新段階に至る時間幅のある土器が出土している。

(注1) 古式土師器の編年は米田敏幸「土師器の編年1 近畿」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣 1991 を参考にした。

(注2) 樹種鑑定は元興寺文化財研究所に委託した。

### 第3節 小結

第6調査区の調査では庄内式期III段階から5世紀代に至る遺構を検出した。各遺構の時期をまとめると、S E 2 0 3が庄内式期III段階、S E 2 0 5、2 3 1が布留式古段階、S K 2 0 2が布留式新段階となる。柱穴群の時期は遺構の配置や出土遺物から考えて、S K 2 0 2に併行する時期と考える。

### 第3章 考察

木の本遺跡は弥生時代から近世に至る複合遺跡であるがとくに古墳時代の集落の変遷について若干のまとめを試みたい。さらに出土遺物を検討することにより遺跡の性格に迫ることにする。

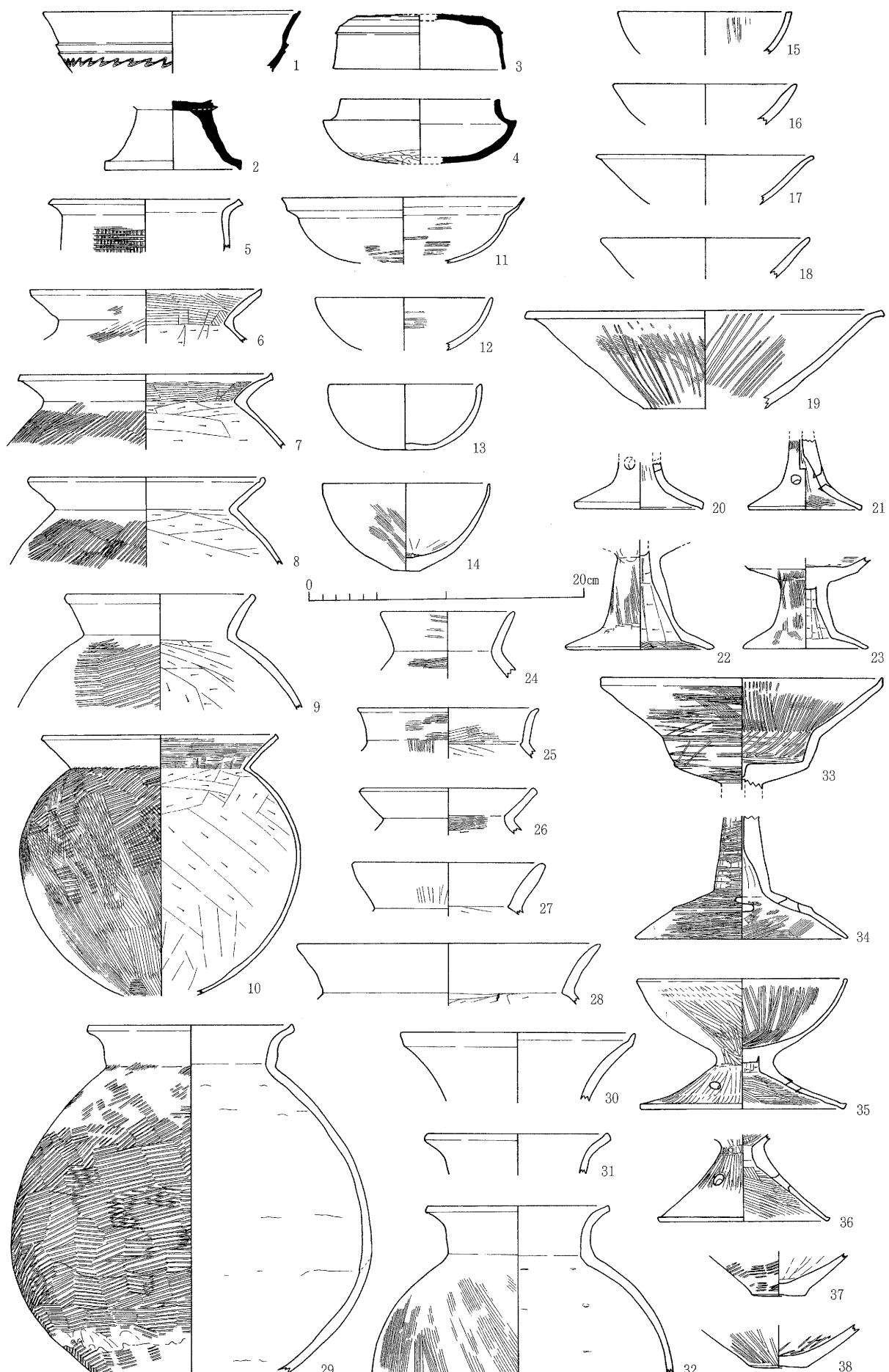


図12 SK 202出土遺物実測図

## 第1節 集落の変遷

表1は遺跡内でおもに古墳時代の遺物・遺構が検出された地点を一覧表にしたものであり、図1-3はその調査地点を示したものである。これらの調査結果を見ると木の本遺跡は弥生時代中期に集落の萌芽が見られた後いったん途絶える。次にこの地に人手が入ったのは古墳時代初頭庄内式期になる。しかし庄内式期から布留式古段階にかけては、土器の出土は豊富だが集落の中心となるような住居遺構などは検出されていない。集落の縁辺に該当するのかもしくは削平、整地された可能性がある。布留式新段階になると掘立柱建物など住居遺構が検出されるようになる。住居遺構の検出範囲から見て、南北300m、東西250mの居住域を想定できる。木の本遺跡は5世紀中ごろに集落として最も発展を遂げるといえる。

番号	調査者	調査区	主な遺構	文献
①	八尾市教育委員会		弥生時代中期の井戸、古墳時代中期の掘立柱建物	注1
②	八尾市教育委員会		古墳時代中期の土坑、柱穴	注2
③	八尾市文化財調査研究会	SK83-03	古墳時代の掘立柱建物	注3
④	八尾市文化財調査研究会	SK91-05	古墳時代前期（庄内期）、中期の遺構	注4
⑤	大阪府教育委員会	第1調査区	古墳時代初頭～中期の土坑、井戸、溝	注5
⑥	大阪府教育委員会	第2調査区	古墳時代前期（庄内期から布留期）の井戸、土坑	注6
⑦	大阪府教育委員会	第3調査区	5世紀後半～6世紀の土坑など	注6
⑧	大阪府教育委員会	第4調査区	古墳時代前期（庄内期から布留期）の土坑	注6
⑨	大阪府教育委員会	第5調査区	古墳時代前期（庄内期）の土坑、溝	注6
⑩	大阪府教育委員会	第6調査区	古墳時代前期～中期の土坑、井戸、溝、柱穴群	本報告

表1 古墳時代遺構・遺物検出地点一覧表

(注1)『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要1980・1981年度』(八尾市教育委員会 1983年3月)

(注2)『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書II』(八尾市教育委員会 1992年3月)

(注3)『昭和58年度事業概要報告』(八尾市文化財調査研究会 1984年)

(注4)『八尾市文化財調査研究会報告34』(八尾市文化財調査研究会 1992年)

(注5)『木の本遺跡発掘調査概要・III』(大阪府教育委員会 1999年3月)

(注6)『木の本遺跡発掘調査概要・IV』(大阪府教育委員会 1999年12月)

## 第2節 出土遺物の検討

第6調査区では庄内式期と布留式期の二つの時期にまたがる遺構を同一遺構面で、重複して検出した。この遺構面を覆っている遺物包含層からも庄内式期から布留式期に至る多量の土器が出土地した。遺物の内容を検討・整理し、遺跡の変遷を追うことが可能かどうか試みて、遺跡の性格に迫ってみたい。



図13 木の本遺跡調査区配置図

#### 遺物の検討の方法

古式土師器は庄内式から布留式土器までの時間的幅のある土器が出土している。まず編年の基準となる器種として扱われることが多い高杯をとりあげて、調査区内での出土状況、個体数の集計など土器群全体としての特徴を追ってみることにした。さらに、とくに出土量の多かった庄内式甕について出土状況、胎土、形態などを調べ、土器群の特徴を探ってみることにした。これと共に、特筆すべき遺物と考えられている須恵器、韓式系土器、土製品、製塩土器などについては、個々の土器の特徴、その系譜を記述することを心がけた。

なお、それぞれの土器については奈良教育大学三辻利一教授に蛍光X線分析を依頼し、原稿を執筆していただいた。その結果は第4章である。ここではその分析結果を踏まえて記述する。

**古式土師器** 高杯は包含層（図3、21～24層）及びSD201出土数を集計した。表2は高杯脚柱部を次の3タイプに分け、10mごとの地区別にそれぞれの出土数を数えたものである。

	90～南	80～90 上層	80～90 下層	SD201	70～80	60～70	60～北	合計
庄内系高杯	3	17	4	3	3	0	1	31
庄内系椀型 高杯		2		2	1			5
布留系高杯	4	18	1	3	9	7	1	43

表2 高杯地区別出土数

- ・庄内系高杯 柱部より屈曲して平たく開く脚部を持つ。脚端部は面を持たない。今回出土した分はほとんど柱部外面の調整が縦方向の面取りの後横方向のヘラ磨き、内面が未調整（しづり痕が残る）である。柱部が中実のものは1点のみであった。
- ・庄内系椀型高杯 短い脚柱部に、屈曲して平たく開く裾部を持つ。
- ・布留系高杯 柱部よりなだらかに開く脚部を持つ。脚端部は面を持つ。ほとんどのものが、柱部内面にヘラ削りが施されている。

また形態観察からおおむね庄内式期IVから布留式期IVまでの高杯が出土していることがわかるが、表2をみると庄内系高杯は調査区南半分に集中していることがわかる。逆に柱穴群などを検出した地区(No.21+60～70)では布留系高杯の出土が多い。

次に庄内甕については包含層及びSD201、SE203出土分の口頸部片を集計した。ここで取り上げた庄内甕は弥生形の甕、布留式甕、明らかに他地域から搬入された甕(吉備、山陰系の甕など)を除いたものである。資料は口頸部のみを抽出しているので布留系の甕、布留式影響の庄内形甕と呼称されているものが含まれている可能性がある。庄内甕は蛍光X線胎土分析を依頼することを考慮し、前もって個々の個体の胎土や色調を肉眼で観察し、次のA～Hの8種類に分け集計した。

- A 1mm未満の角閃石などの微砂粒を多く含む。見た目で赤っぽい色調でキラキラしている。
- B 1mm未満の灰黒色粒(角閃石)、3～5mmの白色粒(長石など)含み、色調が白っぽい。
- C 1mm未満の微砂粒(角閃石など)をごく少量含む。調整が丁寧。
- D 1mm前後の白、灰、黒灰色砂粒(角閃石など)を含む。砂粒の量は多いが粒がそろっている。
- E 2mm前後の白色粒(長石など)が多く、1mm前後の黒灰色粒(角閃石)を多く含む。
- F 1mm前後の白、灰、黒灰色砂粒を含む。角閃石が多い。
- G 1～3mmの黒、茶、灰色粒を多く含む。全体にざらざらした粗い胎土。
- H 色調が橙～黄橙色系で角閃石を含まない。所謂生駒西麓の胎土ではないもの。

表3は出土数の各地区胎土別の集計表である。高杯と同じように庄内甕の出土は調査区南半分部に集中している。80～90地区では、すべての胎土のものが出土している。この中で生駒西麓でない胎土Hの出土数の全集計資料数に占める割合は約7%、さらに出土が集中した80～90地区の上層では集計資料中約13%を占める。非生駒産の庄内甕は80～北の地区では出土していない。

さらに、胎土分類は形態や法量など土器の他の要素とどう関連するか調べるために、口縁端部の形態を次の6種類に分け、特に出土が集中した80～90地区の上層と、庄内式土器のみ出土したSE203の甕を分類集計した。

	90～南	80～90 上層	80～90 下層	SD201	SE203	70～80	60～70	60～北	合計	%
胎土A		3	2						5	3.25
胎土B	2	7	7	2	1	1	2	1	23	14.94
胎土C		5	4	9	3	4			25	16.23
胎土D	5	12	2	4	3	5		3	34	22.08
胎土E		10	2	6	1	2	3		24	15.58
胎土F		4	2	7		2			15	9.74
胎土G	1	5	3	3	3	2			17	11.04
胎土H	1	7	1	2					11	7.14
合計	9	53	23	33	11	16	5	4	154	100.00

表3 庄内甕胎土別・地区別出土数

	胎土A	胎土B	胎土C	胎土D	胎土E	胎土F	胎土G	胎土H	合計	%
形態1				1			1		2	3.77
形態2	1	1	1		3	1	1	1	9	16.98
形態3	2	1	1	3	1	2	2	2	14	26.42
形態4		1	1	2	1		1	1	7	13.21
形態5		1	1	4		1			7	13.21
形態6		3	1	2	5			3	14	26.42
合計	3	7	5	12	10	4	5	7	53	100.00

表4 庄内甕80～90地区上層出土数

	胎土A	胎土B	胎土C	胎土D	胎土E	胎土F	胎土G	胎土H	合計	%
形態1									0	0.00
形態2						1		1	2	18.18
形態3		1	1	1					3	27.27
形態4					1	1			2	18.18
形態5						1		2	3	27.27
形態6						1			1	9.09
合計	0	1	3	3	1	0	3	0	11	100.00

表5 庄内甕SE203出土数

- 1 丸くおさめた端部を持つ口縁
- 2 端部に面をもつ口縁
- 3 端部が上方につまみあげられ外傾する端面を持つ口縁
- 4 端部が上方につまみあげられ内傾する口縁
- 5 端部が上方につまみあげられ端面に凹線がある口縁
- 6 端部が内側に肥厚して外形する端面をもつ口縁

表4は80～90地区上層、表5はSE203出土分の集計表である。

形態6の端部は上方へのつまみ上げが弱く、端部が内側に折り返り気味のものである。布留式祖系甕・布留系の甕に近いものでないかと思われる。80～90地区上層では形態6の甕は集計資料全体に占める割合は約26%になる。SE203では1点の小片が出土している。

今回の調査区の庄内甕は遺構から出土したものは庄内式期Ⅲに相当するものであるが、包含層出土のものは、布留式への過渡期の甕をある程度含んでいるのではないかと思われる。

次に出土量が少ない、特筆すべきものを取り上げる。

**須恵器** 表6は出土数集計表である。須恵器の調査区内での分布は、須恵器が出土した遺構であるSK202のある70～80地区を中心に広がっている。須恵器についてはほぼすべてのものを三辻氏に蛍光X線分析をしていただき産地の推定をして頂いた。その結果、伽耶産（伽耶産（?）のものも含む）の器種は甕、ハソウ、鉢の三種類で、その分布は70～80地区より北側に片寄っていることがわかった。図14は出土した須恵器の一部である。8、10、11は伽耶産（?）と推定されているものである。他は9の樽型ハソウを除きすべて陶邑産である。陶邑編年I型式2段階に

	90~南	90~80 上層	90~80 下層	70~80	60~70	60~北	SK202	SD234	合計	伽耶產、 伽耶產(?)
蓋杯		3		1	2		2			8
高杯蓋				1						1
高杯杯部				1			1			2
高杯脚部					1		1			2
甕体部		4		9 (3)	1	5 (1)	2 (2)	1 (1)	22 (7)	
小型器種	1	2			1	1				5
鉢		1		2 (1)		1 (1)				4 (2)
樽型ハソウ			1							1
ハソウ		1		3 (1)	2					6 (1)
器台杯部		1				1				2
器台基部		1								1
器台脚部		1								1
器種不明				1						1
合計	1	14	1	18 (5)	7	8 (2)	6 (2)	1 (1)	56 (10)	

表6 須恵器地区別出土数 ( )は内数

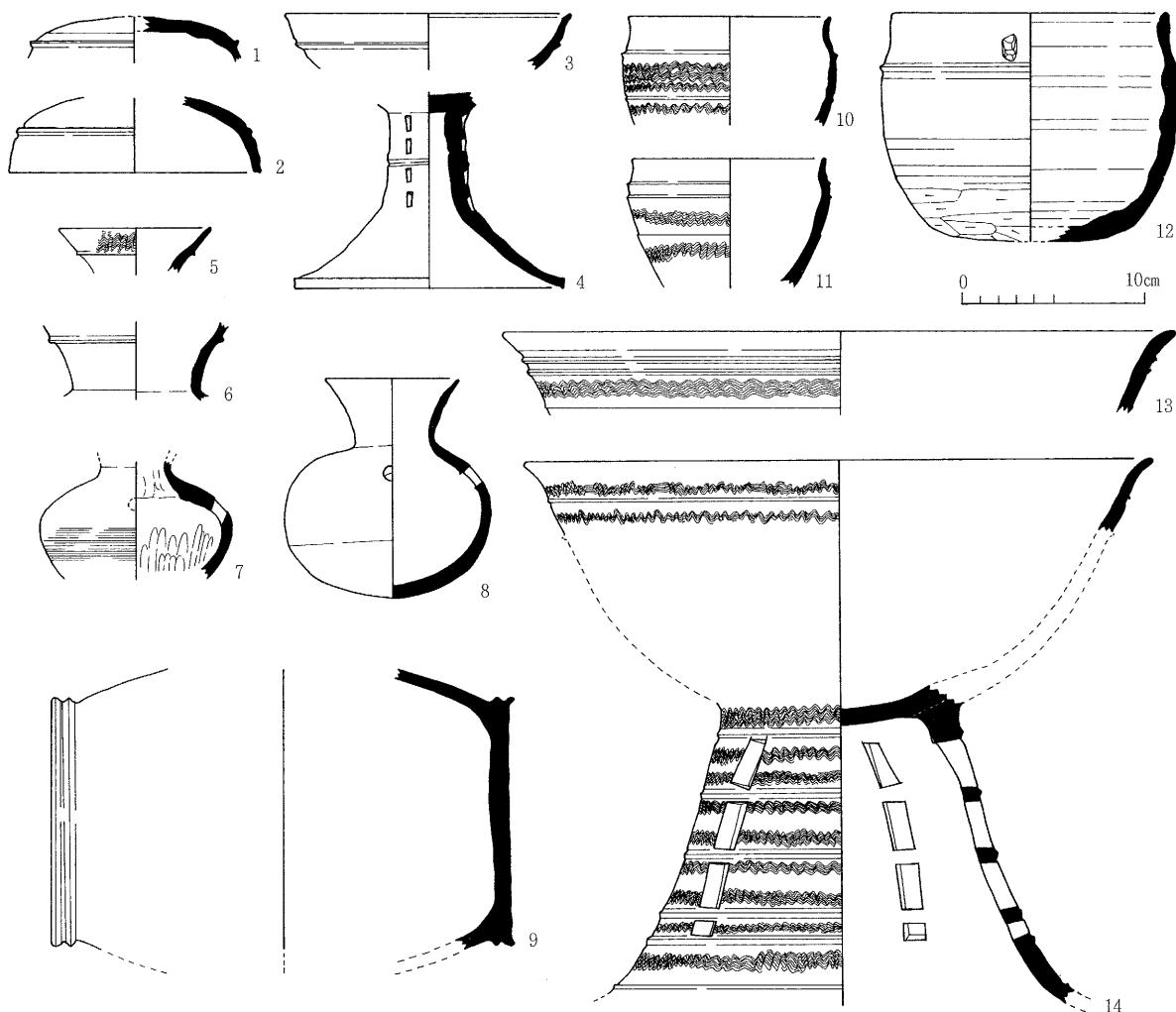


図14 出土須恵器実測図

比定できる一群と思われる。

**韓式系土器** 壺、甕、平底鉢、こしきなどが出土している。表7は出土数集計表である。重複を防ぐため体部小片については集計していない。口頸部片、明らかに一個体になる底体部片、底部片、こしきの場合はとくに把手の出土数を集計した。集計できなかった体部片は格子および平行タタキが施されている。須恵器と同様70~80地区を中心に分布が広がる。

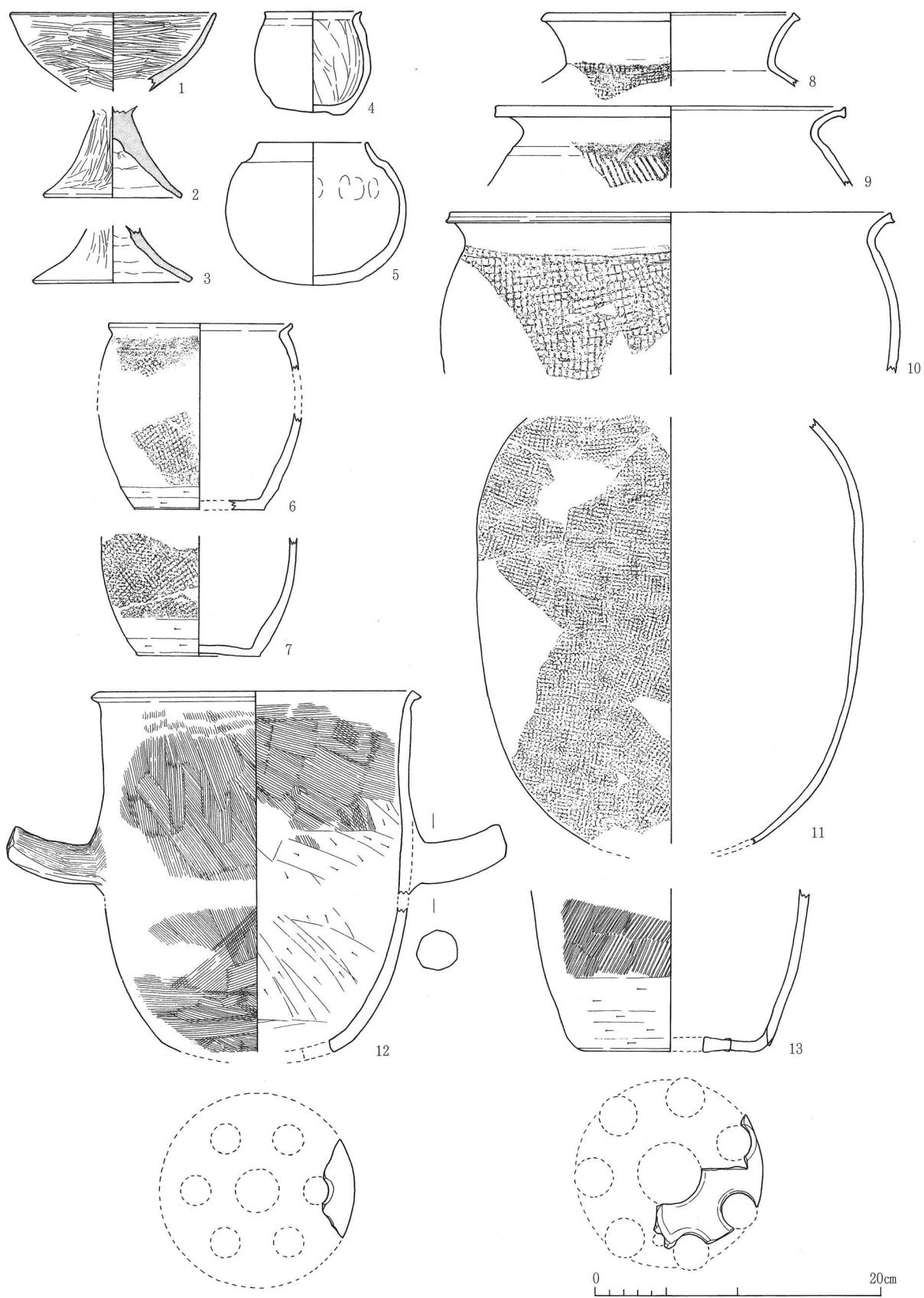


図15 出土韓式系土器他実測図

図15は出土した韓式系土器の一部である。軟質の平底鉢は6、7は外面格子タタキ、体部と底部の境にヘラケズリがほどこされている。図化しなかったものも含めて、平底鉢の底部外面にロクロの圧痕の残るものは無かった。8、9は丸底広口壺の、10は鍋の口頸部である。体部外

	90~南	90~80 上層	90~80 下層	70~80	60~70	60~北	SK202	SD234	SD201	小計	合計
長胴甕体部		1									1
平底鉢			2	1			1			4	
平底鉢底部				2	5		1			8	
平底鉢小計			2	3	5		2			12	
鍋口縁部				1							1
丸底広口壺口縁部				2							2
こしき										2	2
こしき底部		1	1	2					1	5	
こしき把手		2	1	3	2	1	1			10	
こしき小計		3	2	5	2	1	1		3	17	
黒色磨研土器				3							3
土製支脚				2	1	1	1				5
合計	0	4	4	16	8	2	4	0	3		41

表7 韓式系土器地区別出土数

面にはタタキメが残る。11は長胴甕で外面格子タタキが施され、全面煤が付着している。

12は外面はけ調整、内面ケズリで仕上げ、13は外面平行タタキ、底部との境にヘラ削り、内面なでで仕上げたこしきである。共に蒸気孔は多いと推定する。図化しなかったものも含めて、こしきの把手は1点を除き他はすべて牛角状である。

4、5は韓式系土器としてよいか疑問があるが、これまでの土師器に系譜を求められないものである。(したがって集計表には入れていない)4は小型の平底の鉢で、内外面ナデ調整、煤、炭化米が付着していた。5は丸底の鉢である。

**黒色磨研土器** 70~80区で3点出土している。図15の1は椀状の杯部である。内外面瓦器椀と同様の横方向のヘラ磨きが施され、炭素が吸着し、黒色を呈している。断面灰色である。2、3は高杯の脚部である。すかし穴は無く、脚端部は面を持つ。外面縦方向のヘラ磨き、内面は粘土の継ぎ目が残り、脚端部は横ナデで仕上げられている。この3点は、瓦質焼成土器のうち特に外面にヘラ磨きが施されている黒色磨研土器に分類されるものである(注1)。隣接する長原遺跡、久宝寺北遺跡など少数の出土例のうち、ヘラ磨きが施されている例としては、志紀遺跡(注2)の

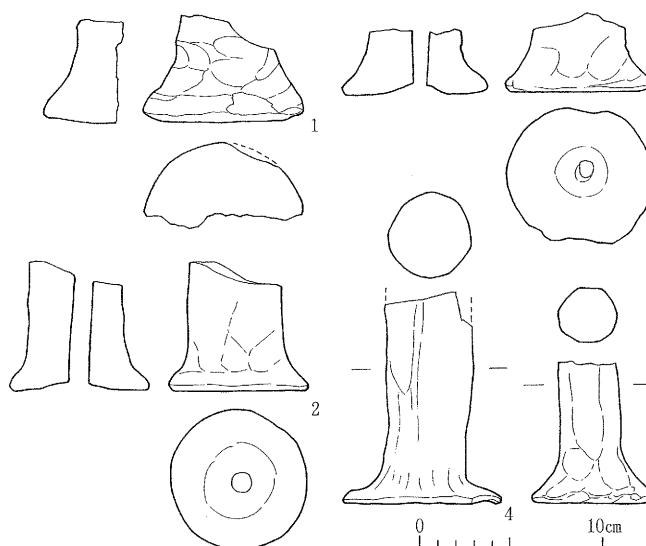


図16 土製支脚実測図

杯身、小阪合遺跡(注3)の高杯などがある。

注2文献でもまとめられているように、器種、形態は遺跡ごとにばらつきがあり、初期須恵器、韓式系土器と共に伴している特徴がある。

**土製支脚** 70~80地区を中心に5点出土した。

図16の1~3は棒に粘土を巻きつけて成型したと思われいずれも中心に穴があく。4はやや不整形でいびつである。5はSK202から出土した。他に比べてやや細めである。

5火熱を受け赤変、いずれも先端は欠いている。かまどの支脚として用いられたと思われる。

	80～90上層		80～90下層		70～80		60～70		60～北		SK202		SD201		合計	
	総重量 単位g	個数	総重量 単位g	個数	総重量 単位g	個数	総重量 単位g	個数	総重量 単位g	個数	総重量 単位g	個数	総重量 単位g	個数	総重量 単位g	個数
ナデ	0.7	(1)	0.4		26	(25)	133.4	(108)	0.2		3.7	(5)	2.2	(2)	166.6	(141)
タタキ			1.2	(1)	1	(1)	22.6	(14)							24.8	(16)
合計	0.7	(1)	1.6	(1)	27	(26)	156	(122)	0.2		3.7	(5)	2.2	(2)	191.4	(157)

表8 製塙土器地区別出土数・出土量集計表

大阪府で支脚が一度にまとまって出土した例は無く、近畿では奈良県発志院遺跡、和歌山県音浦遺跡、鳴神遺跡に類似例がある（注4）。

**製塙土器** 甕形のもの1個体と薄手小型丸底のものが出土している。表8は薄手のものを外面の調整がナデ・オサエのものとタタキ目が残るものに分け、地区ごとに出土した総重量と一片1cm以上の個体の数を集計したものである。これによると分布の中心は60～70地区にあり、ナデ・オサエで仕上げたものが多いのがわかった。

以上、出土遺物を概観した。全体として庄内式の土器は調査区の南側、布留式土器はやや南より、初期須恵器、韓式系土器など5世紀代の土器は調査区中央部分に分布が片寄ることになった。今回の第6調査区の南側、下流にあたる第5調査区でも庄内式期の遺構が検出されており、この時期の遺構群の北限が第6調査区にあると推定できる。口縁部形態6の庄内甕が布留式への過渡期の甕とすれば遺構の検出は無いものの庄内式期から布留式期へ集落はと継続していた可能性がある。初期須恵器、韓式系土器などの分布の中心である調査区中央の微高地は5世紀中ごろの居住域となっていたと思われる。

これらの土器群については、試料を抽出して奈良教育大学三辻利一教授に蛍光X線分析をして頂いた。分析試料は出土数を集計した須恵器56点、韓式系土器他23点、黒色磨研土器3点、土製支脚5点、古式土師器、および調査区内の粘土である。古式土師器高杯は、80～90地区上層出土の脚端部庄内式のもの（端部を丸くおさめたもの）9点と布留式のもの（端部に面をもつもの）11点合計20点を抽出した。また80～90地区上下層、及びSD201出土の庄内甕を、肉眼で分類したA～H8種類の胎土ごとに均等に抽出して分析していただいた。SE203出土分の庄内甕は全点分析していただいた。分析データの詳細は表9、10である。

三辻氏は土師器高杯の胎土のK-Ca、Rb-Srの両分布図が庄内式から布留式に至る形式変化にかかわらず違いが認められないことに着目され、これら高杯の試料のほとんどを包含する一つの基準領域をつくり、他の土師器や土製品の胎土の分布図をその基準領域と対照させていく方法を取られた。この方法は中河内の古墳時代遺跡で普遍的に出土する器種である高杯の胎土を分析しそれに所謂特殊な出土品の胎土を比較、対照していくことになり、結果として調査地全体の遺物の構成が見通せることになったと考えられる。

分析の結果、土師器（須恵器以外）の胎土は、高杯の試料のほとんどを包含する基準領域の胎土（A群）と、生駒西麓産の庄内甕の胎土（B群）の二種類に分類できることがわかった。庄内

甕のうち肉眼による胎土分類のHはA群の基準領域に入る。こしき、黒色磨研土器等韓式系土器や土製支脚などの胎土もA群に入ることがわかった。調査地の粘土は基準領域の端に分布しA群胎土の土器群は調査地内の粘土で製作されたものではない。ただ同一地域内の粘土と推定される。すなわち木の本遺跡の土師器や土製品は（生駒西麓産の庄内甕や明らかに他地域からの搬入品を除き）、一般的なものでも韓式系土器とよばれる特殊品でも同じ地域内のどこかで集中的に製作されていたことになる。

基準領域でくくられた同じ地域内というのはどの程度の広がりをもつのか、また他の器種や、搬入土器の分析など今後の検討課題は山積みではあるが、この結果から現時点での木の本遺跡の性格について推論を試みたい。ここで着目されるのは木の本遺跡と同様に初期須恵器、韓式系土器が出土している長原、八尾南遺跡等周辺地域との関連である。

長原遺跡では5世紀中葉から後期前半にかけて多数の古墳が築造されている。また最近の調査成果では堤や柵の築造などの低湿地開発に大陸からの渡来集団の係りが指摘されている（注5）。

木の本遺跡はこれら周辺地域と一体となって古墳築造や、低湿地開発にかかわる渡来系技術者集団の基地的集落のひとつではなかったか、そして大胆な推測を重ねれば、その集落は土器のような生活用品の一元的な供給を受ける、意図的に配置された集団、ある意味ではきわめて政治的に支配された集団ではなかったかと推定し考察のまとめとしたい。

（注1）尾谷雅彦「古墳時代瓦質焼成土器について」『大阪文化財論集』1989

（注2）山田隆一「志紀遺跡で出土した「瓦質焼成」杯身」『韓式土器研究VI』1996

（注3）大阪府立弥生文化博物館平成12年冬季企画展『発掘速報展大阪2000』2000

（注4）『古墳時代の竈を考える』（第32回埋蔵文化財研究集会資料集第一分冊）1992

（注5）清水和明「長原遺跡北部周辺の古墳時代中・後期の様相に関する予察」『長原遺跡東部地区発掘調査報告I』1998.3 大阪市文化財協会

#### 第4章 木の本遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

生産地である窯跡が残っている須恵器はK、Ca、Rb、Srの指紋元素を使って、窯跡へ結びつけて産地を推定することができる。

他方、窯跡が残っていない土師器、弥生土器、縄文土器は産地を直接推定することはできないが、上記4指紋元素を使って胎土研究することができる。同じ胎土を持つ土器を選び出し、土器型式や様式と対比することによって、考古学的に有意な情報を引き出すことは可能である。現在このような視点から、各地で土器の分析化学的研究が進められている。

本報告では木の本遺跡から出土した古式須恵器と土師器の蛍光X線分析の結果について報告する。

はじめに、古式須恵器の分析結果から説明する。古式須恵器の分析データは表9にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1による標準化値で示されている。

古式須恵器については大阪周辺地域では陶邑群—伽耶群間の2群間判別分析で産地が決まる場合が多い。ここでも、両群間の2群間判別分析を試みた。まず、K、Ca、Rb、Srの分析値を使い、陶邑群、伽耶群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値〔これをD<sup>2</sup>(陶邑)、D<sup>2</sup>(伽耶)とかく〕を計算した。これらの計算値も表9に併記されている。機械的に処理すれば、D<sup>2</sup>(X)の値の小さいほうを産地として取り上げることになるが、ここでは一応、2群間判別図にこれらの試料をプロットしてみることにした。そのために、伽耶群、陶邑群間の2群間判別分析図を使い、まず陶邑領域と伽耶領域を確定した。5%の危険率をかけたホテリングのT<sub>2</sub>検定で各母集団に帰属する条件はD<sup>2</sup>(X) < 1.0である。そのために、図17でもD<sup>2</sup>(伽耶)=1.0、D<sup>2</sup>(陶邑)=1.0のところに境界線を引いてある。つまり、D<sup>2</sup>(伽耶) < 1.0の領域が伽耶領域であり、D<sup>2</sup>(陶邑) < 1.0の領域が陶邑領域である。しかし、これらの全領域にそれぞれ、伽耶群、陶邑群の試料が分布するわけではない。一部の領域にしか分布しないのである。この条件を入れると、伽耶領域はD<sup>2</sup>(伽耶) < 1.0、3 < D<sup>2</sup>(陶邑) < 1.0であり、陶邑領域はD<sup>2</sup>(陶邑) < 1.0、1.5 < D<sup>2</sup>(伽耶) < 3.0である。この結果図17にも示されているように、重複領域ができることがある。この領域に分布する試料は伽耶産か陶邑産か判断が難しいことになる。

ここで、木の本遺跡出土古式須恵器を分布させた2群間判別図(図17)を見てみよう。大部分のものが陶邑領域に分布し、伽耶領域に分布したものはNo.54、55の2点だけである。しかし、重複領域に1.0点ばかり分布しており、このうち、理想境界線を挟んで伽耶領域側に分布したものを伽耶(?)と推定した。この中で、No.54、55の近くに分布したNo.11、9、19の3点は伽耶産と推定した。不明領域には3点(No.1、2、43)の3点が分布した。産地推定の結果も表1に併記されている。この結果、大部分のものが陶邑産と推定されることになった。念のため、これらの両指紋図を図18に示しておく。No.2とNo.43は両指紋図が近接して分布しており、Fe、Na因子でも類似する。同一産地の製品と見られる。No.1とNo.55も同一産地の製品である可能性がある。以上の分析結果はいま一度、胎度観察ともつき合わせてみることが必要である。

次に土師器の分析結果を説明する。表10には分析データをまとめてある。土師器については未だ、統計計算をするだけの基礎データは集積されていない。そのため、K-Ca、Rb-Srの両分布図を描いて、データ解析のための探りを入れることにした。まず土師器高杯を取り上げることにした。庄内式と布留式の両形式の土師器が含まれていたからである。図19にはK-Ca分布図を、図20にはRb-Sr分布図を示す。両図を見ると、両形式の高杯は胎土に違いが認められないことがわかる。したがって、これらの高杯は形式にかかわらず同じところで製作されたものと推定される。そこで、図19、20において、これらの資料のほとんどを包含するようにしてひとつの基準領域をつくり、他の土師器や土製品の胎土と比較する上に役立つ対照領域とすることにした。他の土師器や土製品がこの基準領域に分布すれば、土師器高杯(庄内式、布

留式)と同じ素材粘土が使用されており、同じところで製作された可能性が出てくる。

図21、22には、黒色磨研土器と土師器(No.77、78、79)の両分布図を示す。土師器と黒色磨研土器の態度には差異は認め難いことがわかる。しかも、すべて、基準領域に分布しており、庄内式、布留式の高杯と同じところで製作された可能性を示す。

図23、24には土師器(甌)の両分布図を示す。ほとんどすべてのものが基準領域に分布しており、甌も高杯と同じ胎土であることがわかった。

図25、26には形式から見て、韓式土器と推定される土師質土器の両分布図を示す。No.72を除いて他のものは基準領域に対応する。したがってこれらの韓式土器も庄内式高杯や布留式高杯と同じところで製作されたものであると考えられる。ただNo.72のみは両分布図で基準領域をはずれ、また、Naの量も他の土師器に比べ少ない。No.72は別産地の製品であり、したがって、外部地域から持ち込まれた可能性がある。

図27、28には土製品支脚のK-Na、Rb-Srの両分布図を示す。5点の試料はすべて、基準領域に分布し、土師器と同じ素材粘土を使用したことがわかった。

上述してきたように、木の本遺跡から出土した土師器や土製品はいずれも、同じ素材粘土を使って作られたものであり、同一場所で製作された可能性が出てきた。ここで木の本遺跡で採取した粘土の分析データを図29、30に示す。念のため、一塊りの粘土から、それぞれ、3ヶ所から少量の試料を取り出して分析した。分析値はよくまとまっており、一つの粘土塊の別個所の試料を取り出しても、分析値はよくそろうことを示している。そして、粘土(1)と粘土(2)もほぼ重なって分布しており、同じ粘土であることを示している。もうひとつの問題はこれらの粘土は基準領域の端に分布しており、土師器と同じところには分布しなかった点である。粘土を100°C以上の高温で焼成して須恵器を作っても、焼成前後でK、Ca、Rb、Srの指紋に変動がないことが実験的に確かめられている。このことを前提とすると、今回分析した土師器や土製品は木の本遺跡内では作られたものではないことを示している。ただ、粘土の分布位置が土師器から近いので、同じ地域内で製作されたことを示している。しかも種々の土師器や土製品がいずれも同じ胎土を持っているということは、同じ地域内のどこかで、土師器や土製品が集中的に製作されたものであることを示唆している。

最後に、庄内式土師器甌の分析結果を説明する。図31、32にはK-Ca、Rb-Srの両分布図を示す。大部分の土師器甌はK、Rb量が少なく、逆に、Ca、Sr量が多いという際立った特徴を持つことがわかる。その結果、基準領域からは明らかにずれる。さらに、他の土師器に比べて、Fe量が多く、Na量が少ないという特徴を併せもつ。この特徴は鬼虎川遺跡から出土した、所謂、生駒西麓型土器胎土の特徴と一致する。これらは同じ素材粘土を使って製作した土器である。ところが、No.99, 102, 109, 126の4点の甌だけは胎土は異なる。これら4点の甌にはFe量も少なく、胎土観察でも比較的容易に違いが認められると思われる。さらに興味深いのは、これら4点の甌は基準領域に分布し、他の土師器と胎土が同じであるという点で

ある。このことは何を意味するのだろうか？

以上の結果、木の本遺跡から出土した土師器胎土は2種類に分類できることがわかった。すなわち、基準領域に分布したもの(これをA群とする)と、K、R b量が少なく、C a、S r量が多いもの(これをB群とする)の2種類である。一般の土師器胎土はA群であるが、B群胎土を持つのは庄内式土師器甕に限られる。このようなことは木の本遺跡出土土師器のみに限定されるのだろうか、それとも、大阪府下の他の遺跡出土土師器についても成り立つのだろうか、今後の興味深い問題である。

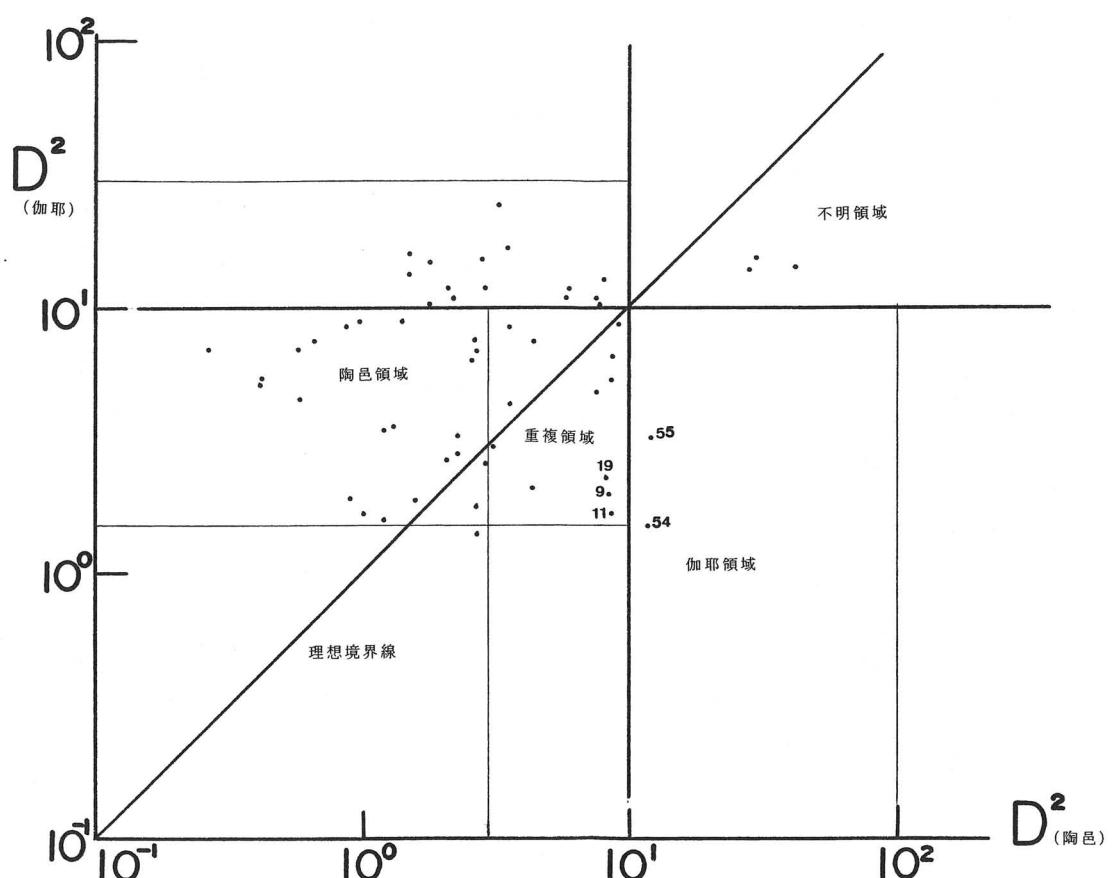


図17 産地推定の結果

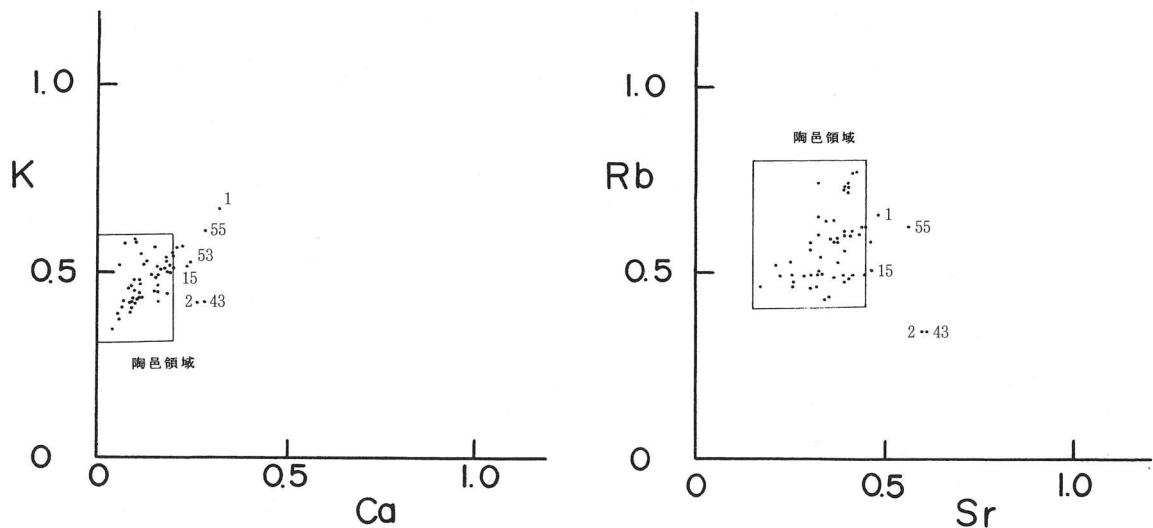


図18 須恵器の両指紋図

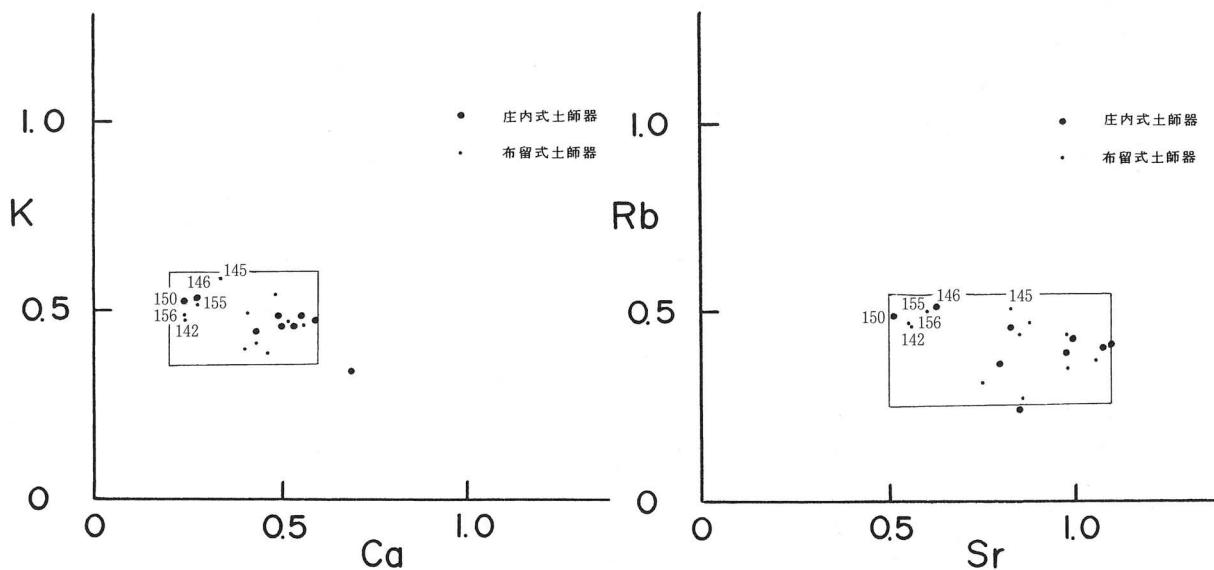


図19 土師器高杯のK—C a分布図

図20 土師器高杯のR b—S r分布図

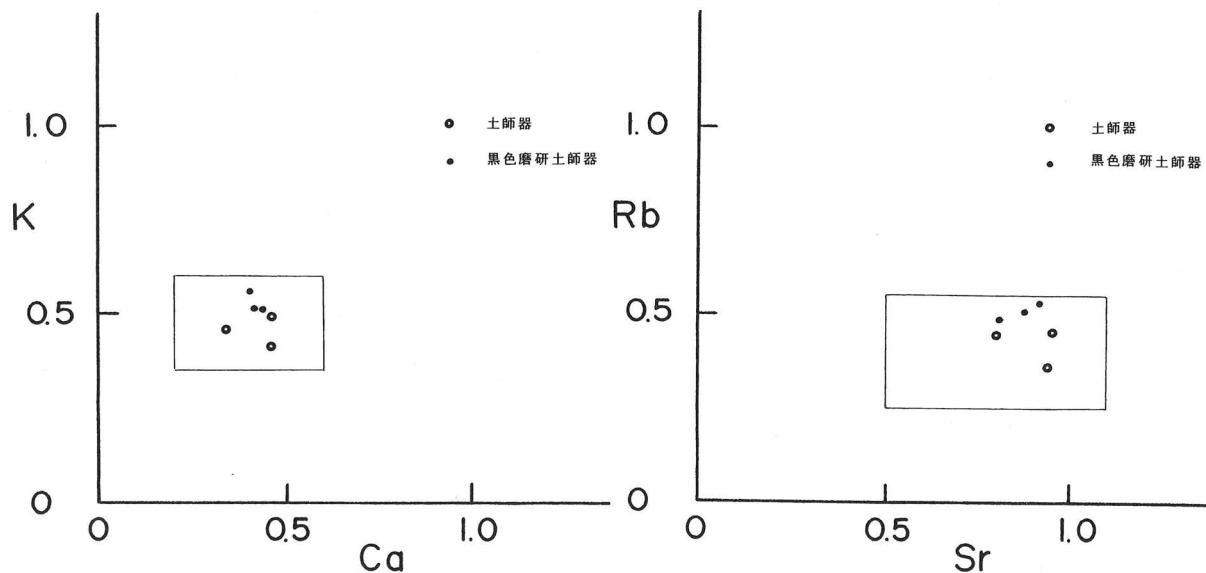


図21 土師器・黒色磨研土師器のK—C a分布図

図22 土師器・黒色磨研土師器のR b—S r分布図

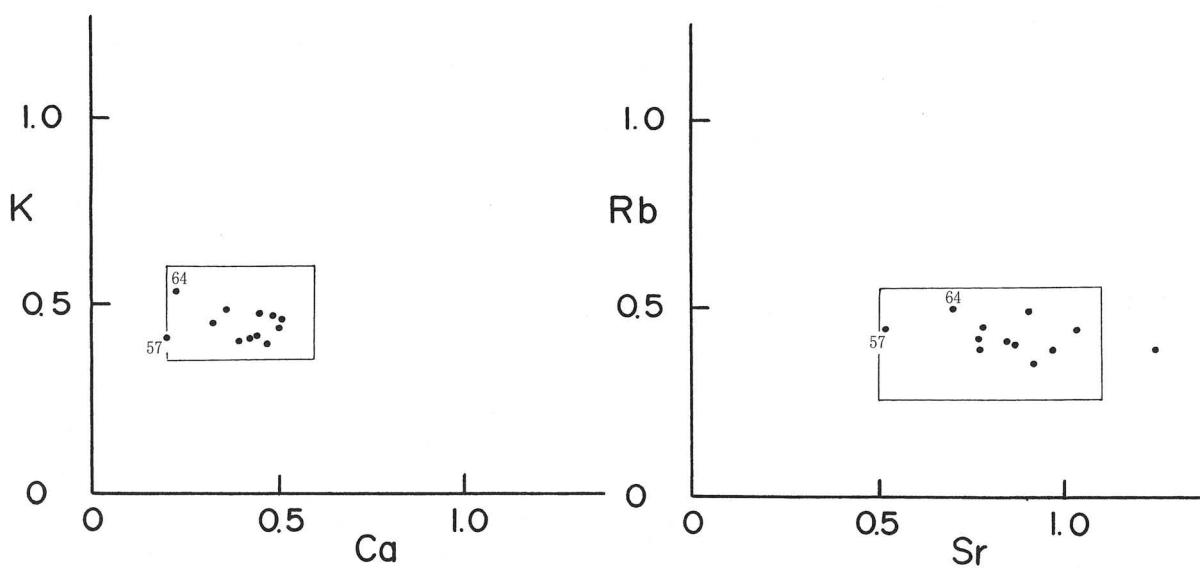


図23 土師器瓶のK—C a分布図

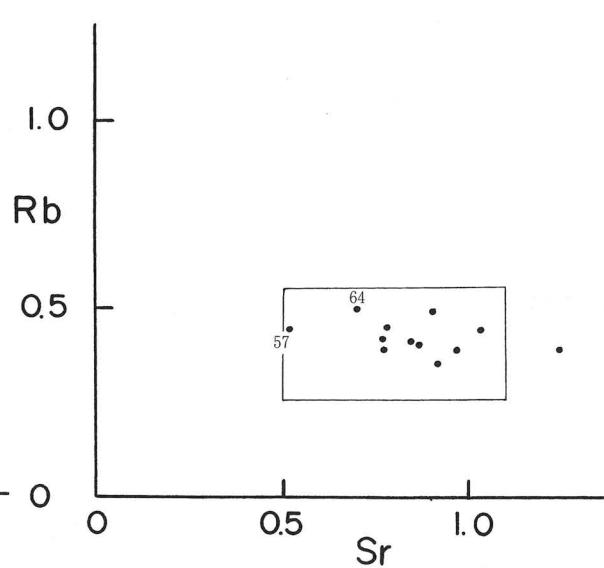


図24 土師器瓶のR b—S r分布図

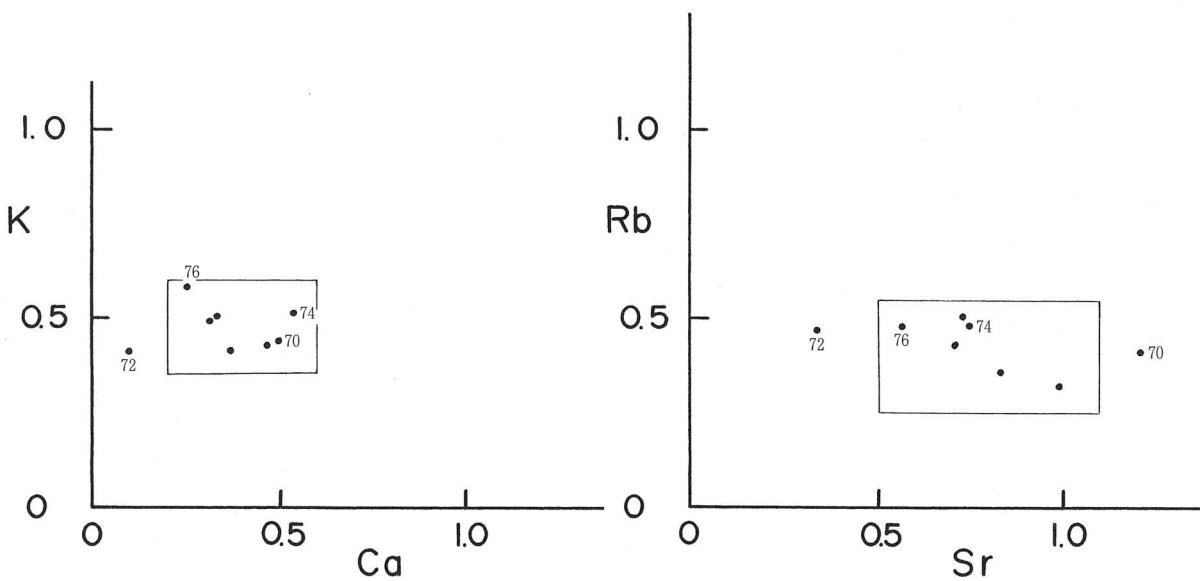


図25 韓式土器のK—C a分布図

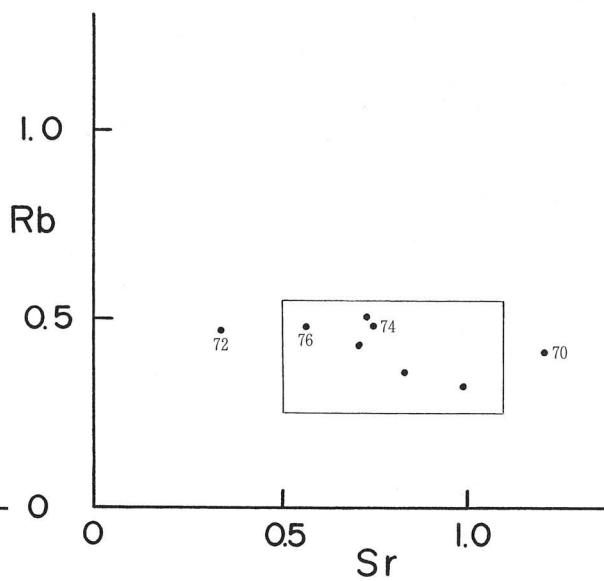


図26 韩式土器のR b—S r分布図

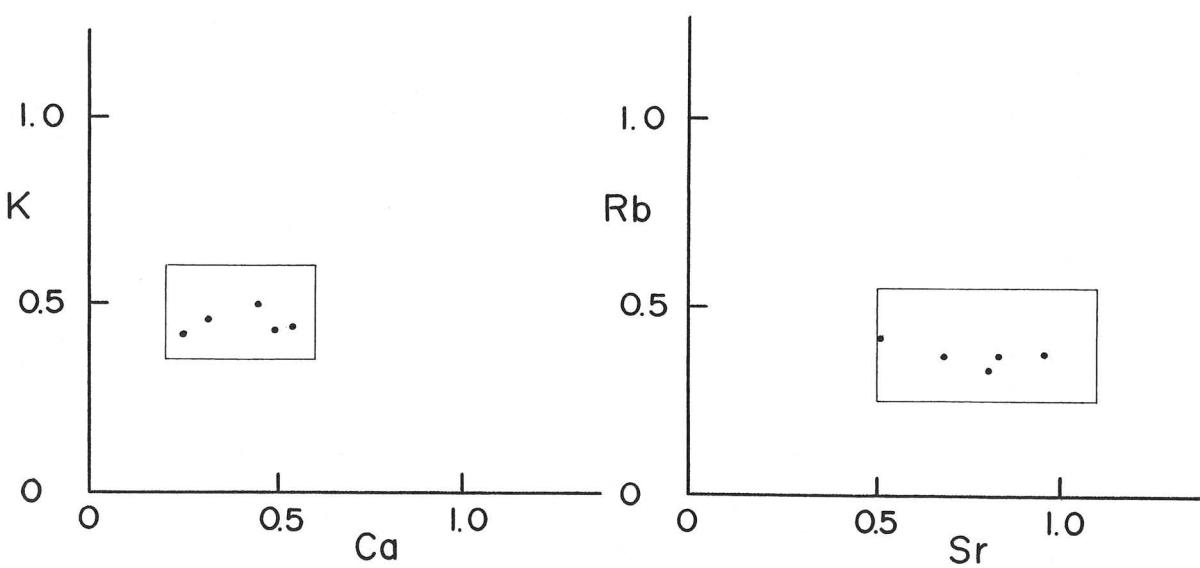


図27 土製品支脚のK—C a分布図

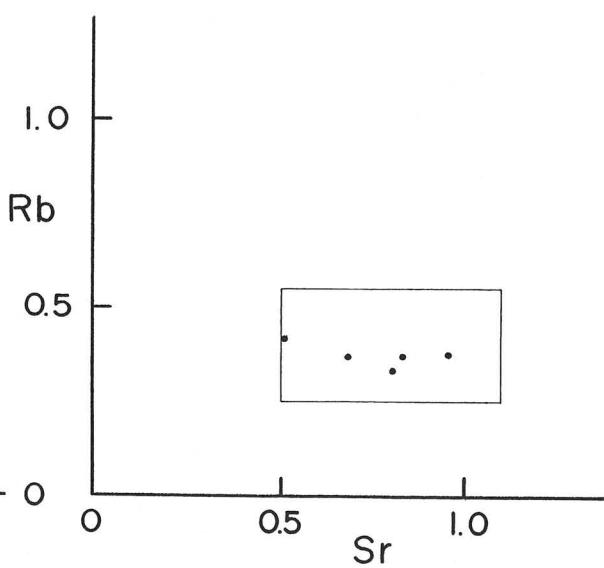


図28 土製品支脚のR b—S r分布図

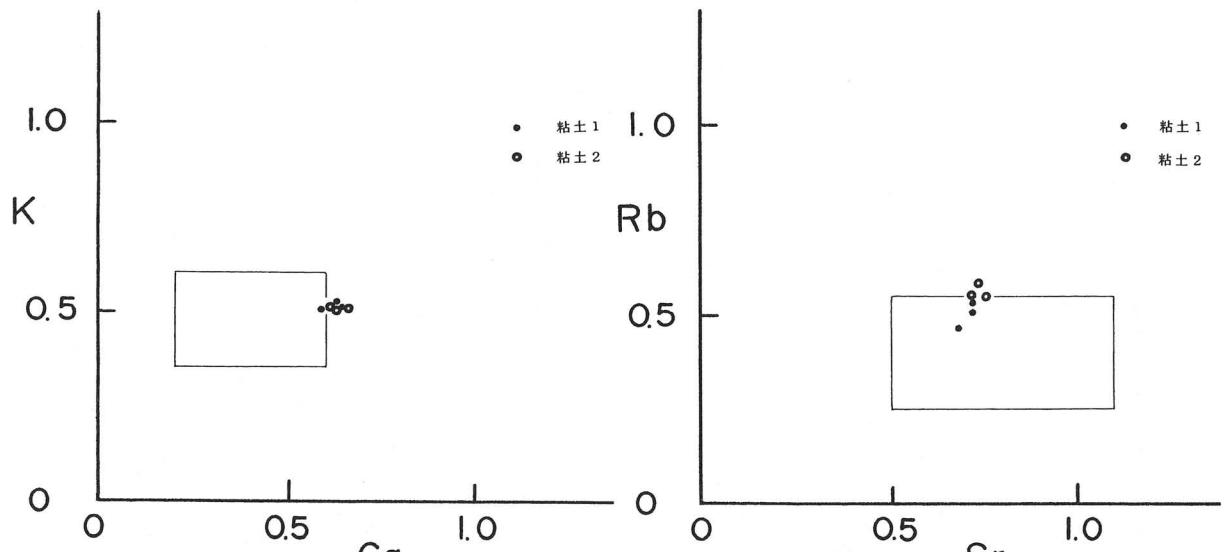


図29 粘土のK—Ca分布図

図30 粘土のRb—Sr分布図

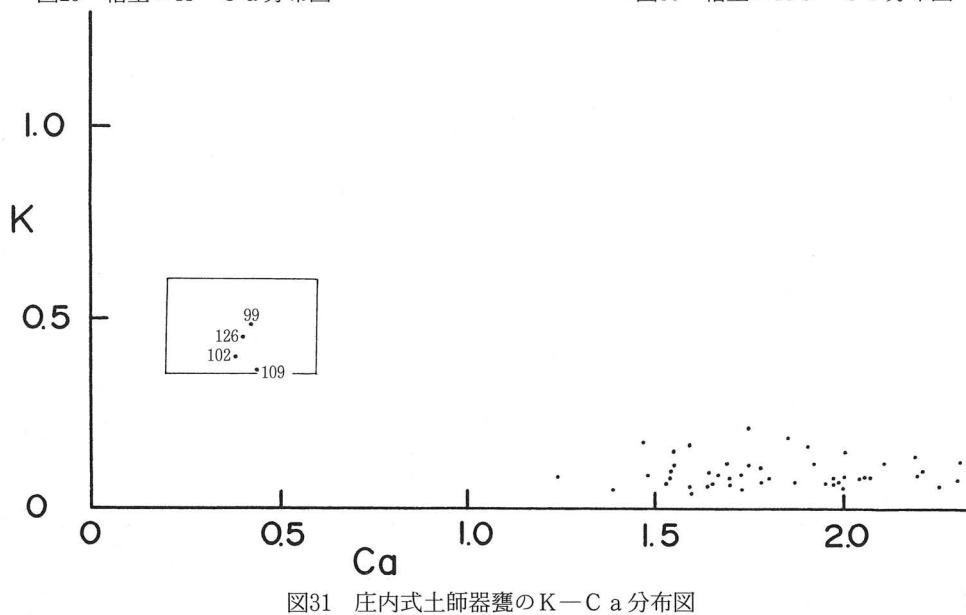


図31 庄内式土師器甕のK—Ca分布図

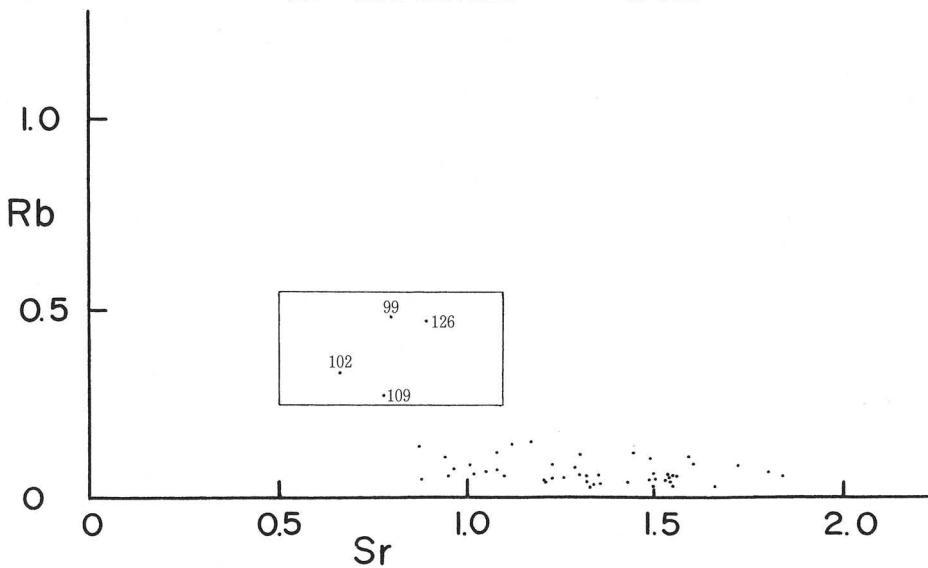


図32 庄内式土師器甕のRb—Sr分布図

試料番号	挿図番号	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D <sup>2</sup> (陶邑)	D <sup>2</sup> (伽耶)	D <sup>2</sup> (野中)	推定産地
1		蓋つまみ	0.674	0.319	2.29	0.655	0.479	0.267	40.80	14.4	139.0	不明
2	14-9	樽型ハソウ	0.424	0.265	2.56	0.344	0.603	0.430	27.50	14.1	106.0	不明
3	14-14	器台基部	0.513	0.175	1.95	0.618	0.445	0.370	1.20	1.6	6.2	陶邑
4	14-14	器台脚部	0.514	0.169	1.95	0.624	0.438	0.372	1.00	1.7	6.8	陶邑
5		甕体部	0.581	0.103	1.45	0.769	0.418	0.294	7.60	11.0	54.2	陶邑
6		甕体部	0.447	0.162	2.42	0.490	0.391	0.369	2.70	6.9	12.2	陶邑
7		甕体部	0.439	0.181	2.39	0.486	0.413	0.366	4.40	7.5	10.0	陶邑(?)
8		甕体部	0.514	0.200	2.77	0.584	0.460	0.324	2.70	1.4	4.0	陶邑(?)
9		甕体部	0.556	0.203	2.18	0.730	0.394	0.210	8.30	2.0	50.3	伽耶
10		甕体部	0.465	0.160	2.38	0.491	0.436	0.405	3.60	4.4	19.1	陶邑(?)
11		甕体部	0.565	0.206	2.10	0.737	0.402	0.200	8.60	1.7	51.1	伽耶
12		甕体部	0.469	0.115	1.89	0.584	0.360	0.337	0.41	5.2	12.7	陶邑
13		甕体部	0.477	0.115	1.88	0.577	0.366	0.355	0.57	4.5	11.7	陶邑
14		甕体部	0.434	0.108	2.57	0.503	0.324	0.288	0.87	8.6	27.6	陶邑
15		甕体部	0.516	0.236	3.23	0.508	0.463	0.342	8.70	6.6	12.8	伽耶(?)
16		甕体部	0.483	0.098	2.41	0.595	0.318	0.302	0.42	5.5	19.4	陶邑
17		甕体部	0.427	0.109	2.60	0.492	0.333	0.324	1.40	8.9	28.6	陶邑
18		甕体部	0.454	0.097	2.51	0.543	0.325	0.170	0.57	6.9	21.9	陶邑
19		甕体部	0.551	0.202	2.11	0.728	0.392	0.203	8.10	2.3	50.1	伽耶
20		甕体部	0.424	0.157	2.40	0.475	0.389	0.378	3.60	8.5	18.1	陶邑(?)
21		甕体部	0.568	0.146	2.17	0.731	0.395	0.200	3.10	3.0	30.8	陶邑(?)
22		甕体部	0.433	0.112	2.61	0.495	0.323	0.308	0.97	9.0	28.7	陶邑
23		甕体部	0.587	0.103	1.49	0.767	0.418	0.282	7.80	10.4	55.3	陶邑
24	14-13	器台口縁	0.418	0.086	2.59	0.456	0.297	0.266	2.10	11.9	48.0	陶邑
25	14-14	器台口縁	0.504	0.182	2.32	0.597	0.431	0.354	1.60	1.9	2.5	陶邑
26	14-8	ハソウ	0.541	0.184	2.35	0.610	0.388	0.358	4.30	2.1	16.2	伽耶(?)
27	14-10	鉢	0.532	0.181	3.31	0.592	0.346	0.234	7.50	4.9	32.5	伽耶(?)
28	14-11	鉢	0.581	0.068	1.87	0.744	0.317	0.245	9.10	8.6	46.0	伽耶(?)
29	14-7	ハソウ	0.487	0.163	2.09	0.559	0.386	0.431	1.30	3.6	5.6	陶邑
30	14-5	ハソウ	0.493	0.142	2.65	0.485	0.361	0.333	2.70	7.7	25.7	陶邑
31	14-6	ハソウ	0.532	0.130	1.90	0.641	0.337	0.345	2.10	2.7	21.0	陶邑
32		ハソウ	0.504	0.190	2.28	0.604	0.405	0.390	2.90	2.6	6.7	陶邑
33		ハソウ	0.443	0.114	2.03	0.528	0.252	0.162	2.90	12.2	65.3	陶邑
34	14-4	高杯脚部	0.447	0.150	2.42	0.484	0.396	0.339	2.60	6.4	15.9	陶邑
35	14-2	高杯蓋	0.464	0.093	1.83	0.583	0.302	0.269	0.26	7.0	26.2	陶邑
36		杯蓋天井部	0.405	0.064	2.02	0.486	0.223	0.200	1.50	15.9	80.3	陶邑
37	14-3	高杯口縁部	0.526	0.125	1.99	0.651	0.322	0.326	2.30	3.3	26.6	陶邑
38		杯身	0.422	0.069	2.05	0.524	0.210	0.250	1.80	14.8	85.4	陶邑
39		小型器種	0.517	0.189	2.26	0.614	0.411	0.388	2.70	1.8	6.8	陶邑
40		小型器種	0.547	0.115	2.01	0.643	0.356	0.327	2.30	2.8	19.2	陶邑
41		小型器種	0.410	0.079	2.08	0.487	0.302	0.161	2.20	11.2	44.3	陶邑
42		小型器種	0.490	0.161	2.17	0.589	0.374	0.354	1.20	3.5	8.5	陶邑
43		鉢体部	0.424	0.276	2.56	0.338	0.612	0.448	29.30	15.4	107.0	不明
44		底部穿孔有	0.402	0.087	2.43	0.437	0.345	0.212	5.80	11.0	54.3	陶邑
45		小型器種	0.517	0.155	2.14	0.604	0.387	0.339	0.90	1.9	7.3	陶邑
46		杯	0.423	0.099	2.20	0.468	0.316	0.220	1.80	10.4	38.1	陶邑
47	14-1	杯	0.393	0.084	2.32	0.433	0.338	0.244	6.00	12.0	58.1	陶邑
48		杯	0.374	0.053	1.78	0.463	0.255	0.153	3.50	16.8	78.8	陶邑
49	12-4	杯身	0.458	0.082	1.89	0.558	0.297	0.276	0.65	7.6	28.3	陶邑
50	12-2	高杯脚部	0.425	0.094	2.00	0.491	0.251	0.247	1.50	13.6	62.5	陶邑
51	12-3	杯蓋	0.345	0.036	2.63	0.463	0.173	0.080	3.30	25.2	147.0	陶邑
52	12-1	高杯杯部	0.386	0.054	1.79	0.474	0.256	0.167	2.80	15.5	71.3	陶邑
53		甕体部	0.526	0.239	3.17	0.526	0.469	0.349	8.60	5.4	12.8	伽耶(?)
54		甕体部	0.568	0.219	2.19	0.715	0.396	0.202	11.70	1.5	55.2	伽耶
55		甕体部	0.614	0.284	1.47	0.621	0.561	0.227	12.20	3.3	62.9	伽耶
56	14-12	鉢	0.519	0.056	2.33	0.491	0.282	0.279	8.00	13.0	67.0	陶邑

表9 木の本遺跡出土須恵器の分析データ

試料番号	挿図番号		器種	出土遺構	肉眼による胎土観察	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
88		土師器	庄内式甕		C	0.049	1.730	3.32	0.026	1.330	0.105
89		土師器	庄内式甕		B	0.149	2.020	3.16	0.069	1.050	0.167
90		土師器	庄内式甕		G	0.110	1.780	3.09	0.088	1.610	0.169
91		土師器	庄内式甕		B	0.114	1.550	3.40	0.116	1.300	0.155
92		土師器	庄内式甕		A	0.122	1.690	3.67	0.082	1.290	0.150
93		土師器	庄内式甕		D	0.044	1.590	2.92	0.028	1.550	0.092
94		土師器	庄内式甕		E	0.087	2.070	3.29	0.058	1.560	0.166
95		土師器	庄内式甕		E	0.089	2.190	2.83	0.063	1.550	0.155
96		土師器	庄内式甕		C	0.081	1.540	3.59	0.061	1.100	0.105
97		土師器	庄内式甕		F	0.077	1.970	2.88	0.060	1.540	0.114
98		土師器	庄内式甕		D	0.122	2.090	2.83	0.110	1.590	0.132
99		土師器	庄内式甕		H	0.486	0.423	1.84	0.479	0.797	0.504
100		土師器	庄内式甕		F	0.059	2.250	3.06	0.046	1.490	0.149
101		土師器	庄内式甕		G	0.072	1.830	4.48	0.051	0.876	0.096
102		土師器	庄内式甕		H	0.397	0.382	2.49	0.329	0.664	0.398
103		土師器	庄内式甕		C	0.096	1.640	4.13	0.074	1.080	0.151
104		土師器	庄内式甕		E	0.063	1.590	3.56	0.037	1.360	0.110
105		土師器	庄内式甕		A	0.066	1.700	3.47	0.054	1.260	0.112
106		土師器	庄内式甕		G	0.081	2.290	3.20	0.046	1.530	0.142
107		土師器	庄内式甕		D	0.055	2.030	3.32	0.034	1.340	0.115
108		土師器	庄内式甕		C	0.086	1.990	3.22	0.047	1.540	0.156
109		土師器	庄内式甕		H	0.365	0.436	3.00	0.266	0.782	0.246
110		土師器	庄内式甕		F	0.135	2.300	2.66	0.061	1.840	0.177
111		土師器	庄内式甕		B	0.191	1.850	3.23	0.149	1.170	0.183
112		土師器	庄内式甕	SD201	F	0.149	1.550	3.41	0.099	1.010	0.104
113		土師器	庄内式甕	SD201	E	0.089	1.730	3.69	0.073	0.965	0.099
114		土師器	庄内式甕	SD201	F	0.085	1.240	3.21	0.065	1.020	0.110
115		土師器	庄内式甕	SD201	B	0.165	1.920	3.38	0.120	1.080	0.291
116		土師器	庄内式甕	SD201	E	0.080	1.700	4.34	0.053	0.947	0.097
117		土師器	庄内式甕	SD201	D	0.082	2.040	3.49	0.064	1.300	0.144
118		土師器	庄内式甕	SD201	C	0.175	1.470	4.35	0.143	0.871	0.081
119		土師器	庄内式甕	SD201	C	0.070	1.980	3.13	0.047	1.320	0.094
120		土師器	庄内式甕	SD201	G	0.065	1.640	2.85	0.051	1.230	0.111
121		土師器	庄内式甕	SD201	F	0.216	1.750	3.15	0.108	1.490	0.189
122		土師器	庄内式甕	SD201	D	0.170	1.590	3.71	0.144	1.120	0.087
123		土師器	庄内式甕	SD201	C	0.082	1.810	3.96	0.060	1.350	0.172
124		土師器	庄内式甕	SD201	C	0.064	1.970	3.56	0.046	1.210	0.099
125		土師器	庄内式甕	SD201	G	0.056	1.530	3.17	0.027	1.660	0.103
126		土師器	庄内式甕	SD201	H	0.451	0.396	1.74	0.468	0.887	0.206
127		土師器	庄内式甕	SD201	E	0.119	1.920	3.89	0.110	0.942	0.161
128		土師器	庄内式甕	SE203	D	0.074	1.780	3.27	0.054	1.520	0.134
129		土師器	庄内式甕	SE203	G	0.083	2.050	3.28	0.066	1.490	0.170
130		土師器	庄内式甕	SE203	D	0.102	2.200	3.25	0.074	1.810	0.180
131		土師器	庄内式甕	SE203	C	0.090	1.670	3.97	0.091	1.230	0.099
132		土師器	庄内式甕	SE203	D	0.072	1.950	3.26	0.043	1.430	0.103
133		土師器	庄内式甕	SE203	C	0.050	1.390	2.99	0.035	1.510	0.081
134		土師器	庄内式甕	SE203	E	0.097	1.540	3.62	0.053	1.510	0.131
135	9-7	土師器	庄内式甕	SE203	G	0.089	1.480	3.83	0.064	1.320	0.125
136	9-6	土師器	庄内式甕	SE203	G	0.116	1.750	3.21	0.093	1.720	0.158
137	9-4	土師器	庄内式甕	SE203	C	0.060	1.640	3.86	0.046	1.210	0.096
138	9-5	土師器	庄内式甕	SE203	B	0.138	2.120	2.91	0.120	1.460	0.198
139		土師器	布留式高杯			0.492	0.412	2.79	0.435	0.850	0.425
140		土師器	布留式高杯			0.539	0.482	2.62	0.466	0.876	0.464
141		土師器	布留式高杯			0.392	0.398	2.98	0.306	0.751	0.401

表10-1 木の本遺跡出土土師器の分析データ

試料番号	挿図番号		器種	出土遺構	肉眼による胎土観察	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
142		土師器	布留式高杯			0.472	0.239	2.15	0.459	0.561	0.407
143		土師器	布留式高杯			0.464	0.555	3.09	0.367	1.060	0.355
144		土師器	布留式高杯			0.472	0.520	2.81	0.439	0.980	0.308
145		土師器	布留式高杯			0.581	0.331	2.06	0.510	0.827	0.651
146		土師器	庄内式高杯			0.525	0.271	2.72	0.513	0.625	0.419
147		土師器	庄内式高杯			0.455	0.532	3.16	0.431	0.997	0.325
148		土師器	庄内式高杯			0.455	0.501	3.02	0.456	0.831	0.302
149		土師器	庄内式高杯			0.481	0.490	2.65	0.407	1.100	0.288
150		土師器	庄内式高杯			0.524	0.244	2.56	0.488	0.506	0.400
151		土師器	庄内式高杯			0.335	0.693	5.23	0.244	0.851	0.253
152		土師器	庄内式高杯			0.470	0.591	3.20	0.387	0.981	0.386
153		土師器	庄内式高杯			0.482	0.554	3.10	0.397	1.080	0.382
154		土師器	布留式高杯			0.412	0.434	2.19	0.349	0.979	0.417
155		土師器	布留式高杯			0.518	0.267	2.85	0.504	0.603	0.420
156		土師器	布留式高杯			0.481	0.240	2.19	0.465	0.555	0.435
157		土師器	庄内式高杯			0.437	0.429	3.46	0.360	0.796	0.330
158		土師器	布留式高杯			0.377	0.463	2.88	0.267	0.862	0.368
57	15-12	土師器	こしき			0.410	0.203	1.54	0.442	0.518	0.224
58		土師器	こしき			0.471	0.446	2.47	0.495	0.907	0.358
59		土師器	こしき			0.461	0.508	2.65	0.454	0.777	0.340
60	15-13	土師器	こしき			0.416	0.444	2.03	0.397	0.866	0.277
61		土師器	こしき			0.410	0.424	1.97	0.390	0.770	0.277
62		土師器	こしき			0.486	0.359	1.97	0.411	0.849	0.390
63		土師器	こしき			0.452	0.324	2.17	0.421	0.767	0.218
64		土師器	こしき			0.532	0.229	1.86	0.499	0.700	0.515
65		土師器	こしき			0.436	0.504	1.56	0.389	1.250	0.389
66		土師器	こしき			0.395	0.467	2.21	0.386	0.970	0.356
67	15-9	土師器	丸底広口壺			0.403	0.392	2.51	0.353	0.917	0.338
68		土師器	こしき	SK202		0.472	0.485	1.98	0.439	1.040	0.354
69	15-11	韓式土器	長胴甕			0.409	0.379	2.32	0.361	0.827	0.284
70	15-7	韓式土器	平底鉢			0.441	0.500	1.73	0.413	1.210	0.376
71	15-6	韓式土器	平底鉢			0.494	0.306	1.65	0.504	0.728	0.438
72	15-10	韓式土器	鍋口縁			0.409	0.102	2.13	0.468	0.339	0.186
73	15-8	韓式土器	丸底広口壺			0.433	0.466	2.71	0.322	0.987	0.293
74		韓式土器	平底鉢	SK202		0.514	0.538	2.50	0.478	0.740	0.301
75		韓式土器	平底鉢			0.503	0.327	1.80	0.432	0.705	0.364
76	12-5	韓式土器	平底鉢			0.582	0.246	2.71	0.482	0.558	0.428
77		土師器	甕			0.487	0.456	1.70	0.453	0.947	0.428
78		土師器	大型鉢	SD201		0.455	0.336	1.88	0.441	0.798	0.415
79	15-5	土師器	鉢			0.414	0.463	2.36	0.364	0.938	0.391
80	15-1	黒色磨研土器	杯部			0.516	0.417	2.39	0.505	0.880	0.288
81	15-3	黒色磨研土器	脚部			0.564	0.402	2.09	0.534	0.915	0.298
82	15-2	黒色磨研土器	脚部			0.514	0.433	2.00	0.490	0.811	0.285
83	16-3	土製品	支脚			0.418	0.249	2.01	0.419	0.514	0.221
84	16-1	土製品	支脚			0.440	0.544	2.83	0.329	0.805	0.382
85	16-2	土製品	支脚			0.459	0.315	2.06	0.374	0.684	0.211
86	16-4	土製品	支脚			0.428	0.491	2.27	0.366	0.833	0.310
87	16-5	土製品	支脚	SK202		0.498	0.449	2.41	0.371	0.956	0.380

表10-2 木の本遺跡出土土師器の分析データ

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	きのもといせきはっくつちょうさがいよう・V
書 名	木の本遺跡発掘調査概要・V
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤田道子、三辻利一
編集機関	大阪府教育委員会
所 在 地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351
発行年月日	2001年3月

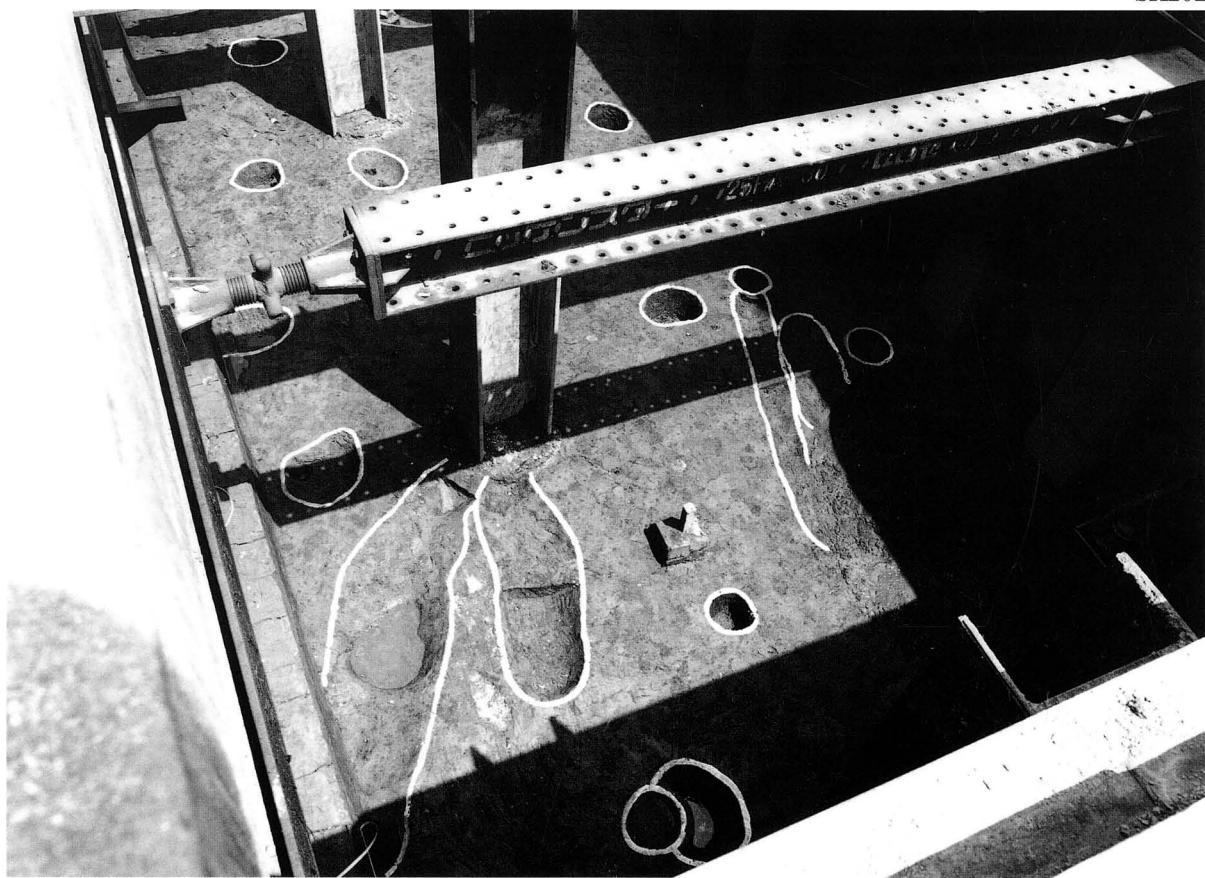
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
木の本遺跡	八尾市 南木の本 3丁目	27212	35	34° 35' 6"	135° 35' 32"	2000年3月 2000年5月	214m <sup>2</sup>	一級河川 平野川改 修工事

所収遺跡名	種 别	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木の本遺跡	集落	古墳時代	溝、ピット、 土坑、井戸、 落ち込み	古式土師器、 須恵器、韓式 系土器、製塩 土器、木製品	

# 図版



SK202



60~70地区 遺構面

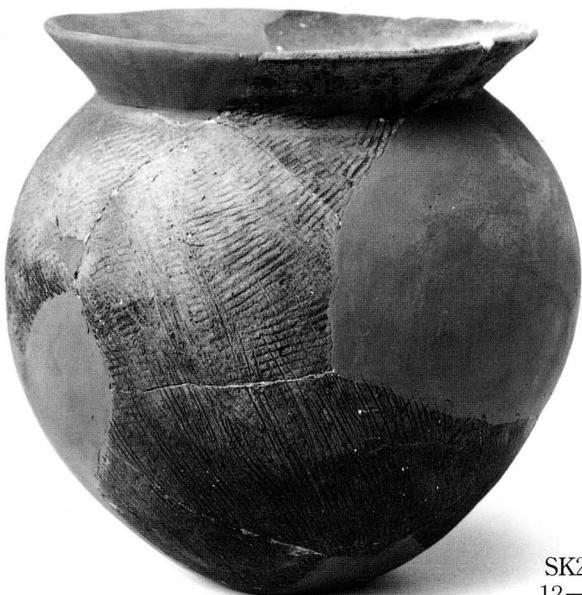


SD201  
遺物出土状況



右上 SE231 遺物出土状況  
左上 SE205 遺物出土状況  
左下 SE203 遺物出土状況

図版2  
出土遺物



※番号は挿図番号と対応

図版3 出土遺物



15-4



15-5



15-6



15-11



15-7



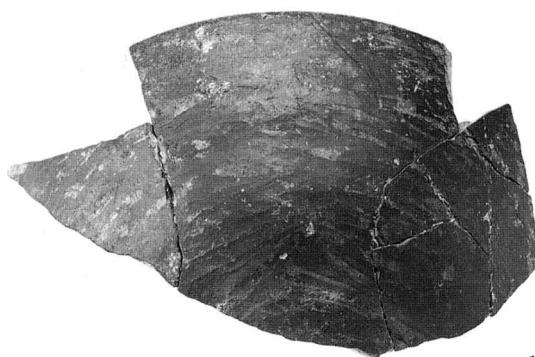
15-10



15-12

※番号は挿図番号と対応

図版4  
出土遺物



15-1



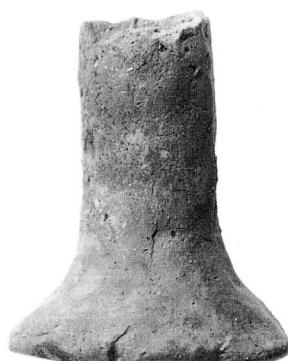
14-12



15-2



14-8



16-5



16-2



16-1



16-4



16-2



14-4

※番号は挿図番号と対応

## 木の本遺跡発掘調査概要・V

—一級河川平野川改修工事に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351

発行日 2001年3月

印刷 サツキ印刷株式会社

TEL. 072-828-0171

